

多勢 さうだとも。さうだとも。

忠次 (だまつてゐる) …

浅太郎 なあ！ あつさりど名指をしてくんねえか。

忠次 (だまつてゐるが) 名指しをする位なら、手前達に相談はかけねえや。みんな命を捨て、働いてくれた手前たちだ。俺の口から差別はつけたくねえのだ。

九郎助 こりや、尤もだ。親分の云ふのが尤もだ。こんなまさかの場合に、捨て、置かれちや誰だつていゝ氣持はしねえからな。

浅太郎 (九郎助に) 手前のやうな奴があるから物事が面倒になるのだ。年寄は足手まとひですから、親分わしや茲でお暇をいたゞきすと、あつさり出ちやどうだい。

九郎助 何だと野郎、手前こそまだ年若でお役に立ちませんから、此度の御用は外さまへねがひますと云つて引き下れ。

浅太郎 何だと。

忠次 おい！ 浅！ 手前出すぎるぞ。だまつてゐろ！

浅太郎 はい、はい。

(釋迦の十藏、ふとひぎをすゝめて)

十藏 なあ、親分いゝことがあらあ。

二三人 何だ。何だ。云つて見る。

十藏 籤引がいゝや。みんなで、籤を引いて當つたものが親分のお伴をするんだ。

忠次 なるほどな。こいつは恨みつこがなくていゝや。

嘉助 親分何を云ふんだい。こんな青二才の云ふことを聞きちや、ダメぢやねえか。籤引だつて、馬鹿な。もし籤が十藏のやうな青二才に當つて見ろ。親分のお伴どころか、親分の足手まとひぢやねえか。籤引なんか俺眞平だ。こんなとき、一番物を云ふのは腕つ節だ！ なあ、親分！ くだらねえ遠慮なんかしねえて、たつた一言嘉助ついて来い！ と云つておくんない！

喜藏 嘉助の野郎、大きいことを云ふない。腕つ節ばかりで、世間さまは渡れねえぞ。まして、これから知らねえ土地を遍めぐつて、上州の國定忠次でございと云つて歩くには、駈引萬端の軍師がついてゐねえことには、動きはとれねえのだ。幾ら手前が、大めし喰ひの大力だからと云つて、ドヂばかりを踏んでみちや旅先で飯にはならねえぞ。

九郎助 (今までだまつてゐるが) 腕つ節だとか駈引だとか、そんなことを云つてみちや限がねえ。こんなときは、盃を貰つた年代順だ。それが、まつとうな順番だ。盃を貰つたのは、俺が一番古いんだ。その次ぎは彌助だつた。なあおい！ (彌助の方を見る)

浅太郎 九郎助ぢいさん、何を云ふんだい。葬禮のお伴ぢやねえんだぞ。年寄ばかりが、ついてゐていざとなつたときはどうするんだ。

九郎助 手前達にそんな心配をさせるものか。かう見えたつて稻荷の九郎助だ。

浅太郎 その睨みが、あんまり利かなくなつてゐるのだ。まあ、父さん、さう力味なさんなよ。

九郎助 此野郎!

喜藏 けんかをしちやいけねえつたら!

牛松 親分、俺あお供は出来ねえかね。俺あ腕節は強くはねえ。又、喜藏のやうに軍師ぢやねえ。

が、お前さんの爲には、一命を捨てゝもいと心の内で、とつくに覺悟をきめてゐるんだ。……

三四人 何を云ひやがるんだ。親分のために命を投げ出してゐるのは手前一人ぢやねえぞ。ふざけたことをぬかすねえ。

(牛松しよげて頭をかきながらだまつてしまふ)

忠次 お前達のやうに、さうザワ／＼騒いでみちや、何時が来たつて果てしがありやしねえ。俺一人

を手放すのが不安心だと云ふのなら、お前達の間で入れ札をしてみたらどうだい。札敷の多い者か

ら、三人丈つれて行かうぢやねえか。こりや一番恨みつこがなくつていゝだらうぜ、

喜藏 こいつあ思ひ付だ。

浅太郎 そいつあ趣向だ。

三四人 なるほど、名案だな。

忠次 ぢや一つ入れ札できめて貰はうかな。

四五人 ようがす。合點だ、

(吉藏。にぎりめしを入れた大きいざるを持って出て来る)
吉藏 親分、めしが来ましたぜ。

忠次 こいつはいゝ所へ来た。みんなめしを喰ひながら誰を入れるか思案をして貰ふのだ。

(吉藏、めしをみんなに配る)

吉藏 さあ、みんな二つ宛だぞ。澤庵は三切れづつだ。

皆 ありがてえ、ありがてえ。

喜藏 久し振りに、あたゝかい飯が喰へらあ。

忠次 (にぎりめしを手にしながら) 俺、水が飲みてえや。

吉藏 水なら、半町ばかり向ふに流れがありますぜ。

忠次 さうか、ぢや行つてのんで来よう。

吉藏 とてつもねえ、いゝ水だよ。

三四人 ぢや俺達も行つて来よう。

浅太郎 俺も、顔を一つ洗ひたいや。

(みんな、どや／＼と流れの方へ行く。後には九郎助と彌助と丈がのこる)

九郎助 にぎりめしを、まづさうに喰つてしまつた後、あゝいやだ。いやだ。どう考へてもおらあ人

れ札はいやだな!

彌助 なぜだい、阿兄!

九郎助 入れ札ぢや、俺三人の中へはへいれねえや。
彌助 そんなにお前、自分を見限るにも當らねえぢやねえか。忠次の一の乾兒と云へばお前さんに定

まつてゐるぢやねえか。

九郎助 上部はさうなつてゐる。だが、俺去年大前田との出入りのとき、喧嘩場からひツかつがれてから、ひどく人望をなくしてしまつたんだ。それが俺にはよく分るんだ。上部は、阿兄くんと立てて居てくれても、心の底ぢや俺を軽んじてゐるんだ。入れ札なんかになつて見ろ！ それが、アリと札敷に出るんだからな。

彌助 ……

九郎助 何ぞと云へば、俺を年寄抜ひにしやがるあの浅太郎への意地になつて、俺捨て、行かれたくねえや。

彌助 尤もだ。だが、心配することは入らねえや。お前が、落つこちる心配はねえ。

九郎助 さうぢやねえ。怪しいものだ。どうも俺に札を入れてくれさうな心當りはねえや。

彌助 並河の才助が居るぢやねえか。あの男はお前によつほど世話になつてゐるだらう。

九郎助 いやあ、此頃の若い奴は、恩を忘れるのは早いや。あいつは此頃ぢや、「浅阿兄く」と、

浅にばつかりくつついてゐるやがる。

彌助 ……

九郎助 俺、かう思ふんだ。浅には四枚へいらあ。喜藏には三枚だ。すると後に四枚残るだらう、

その四枚の中で俺二枚取りていのだ。お前は俺に入れてくれるとして。（九郎助ちつと彌助の顔を見る）

彌助 （だまつてうなづく）…

九郎助 お前が俺に入れてくれるとして、アトの一枚だ。俺、此の一枚をとるためには、片腕でも捨てたいのだが。

彌助 冗談云つちやいけねえ！ さう思ひつめなくても大丈夫だよ、喜藏だつて、お前に入れねえものぢやねえよ。

九郎助 あいつは、俺と此頃仲がいくからなあ！ アト一枚だ。あ、アト一枚だ！（ぢつと腕をくむ）

（水を飲みに行った人々、どや／＼と歸つて来る）

喜藏 あんなにぎりめしを、もう十五六喰ひていや。

浅太郎 あれでも、一時の蟲抑へにはありがたい。さあ飯はすんだ。入れ札を早くやつて貰はうか。

喜藏 心得た。

（彼は、懐中より懷紙を出し、脇差をぬいて幾片かに切斷する。みんなに一枚宛渡す）

喜藏 矢立の筆は、一本しかねえぞ。なるべく早く書いて廻してくれ。かいたやつは、小さく折つて

此封籠の中に入れてくれ。

忠次 札の多い者から三人だぜ。

十藏 え、承知しました。

喜藏 十藏、お前からかけ！

（十藏に筆を渡す。めい／＼次ぎ／＼に筆を借りてかく。彌助書き終へ九郎助に近よりて）

彌助 そら阿兄、筆をやるぜ。

(彌助、約束を果したる如くニツコリ笑ふ)

九郎助 ありがたえ。

(九郎助筆を取る。煩惱の情、ありくと顔に浮びしばらく考へ込む)

浅太郎 おい、爺さん。早く筆を廻してくんねえか。

九郎助 何だと!

浅太郎 考へるなら、筆を外へ廻してくれ!

九郎助 だまつてゐろ、入らねえ口をたくなよ!

(九郎助、憤然として筆を下す)

才助 爺さん、俺にかしてくれ。

九郎助 ほら。(筆を投げる)

(才助、それを受取り、彌助の傍へ行く)

才助 なあ、彌助兄! 字を教へてくれ。

彌助 教へてやる! 何と云ふ字だ。

才助 (彌助の耳の傍で何かさゝやく)

彌助 よし、かうかくのだ。(指先で、才助の持つてゐる紙面の上にかいてやる)

才助 分つた。ありがたえ。

(みんな、つぎ／＼にかき了へる)

喜藏 さあ、みんな書いたか。まだ書かねえ奴はねえか。(周囲を見廻す) よし、みんな書いたのだ

な。親分、みんなかきました。

忠次 われ、読み上げて見ねえ。

喜藏 よし、合點だ。

(皆は、緊張して眼をかゝりやかし、壺皿を見つめるやうな目付で、喜藏の手許を睨んでゐる)

喜藏 (折つた紙片をひらきながら) いゝか。みんな聞いてみてくれ。あさ。假名であさとしか書いて

ねえや。だが、浅太郎に違ひねえ! 浅太郎が一枚。(みんなに紙片を見せる) おや、今度も浅太郎

だ。浅太郎が二枚!

忠次 (わが意を得たりと云ふやうに、ニツコリ笑ふ)

喜藏 今度は、喜藏だ。(紙片を見せながら) 何うだい。ウソぢやねえだらう。喜藏が一枚! おや、そ

の次がまた、喜藏だ! ありがたい! みんなは、やつぱり目が高いや。どうだい! 喜藏が二枚

だ!

(喜藏は、得意げに紙片を高く示す。九郎助は、やうやく焦燥の色を現す)

喜藏 おや何だ。丸で、金くぎだ。何だ。くゝろゝすけか。九郎助が一枚だ。

(九郎助、狼狽し、はげしく動揺す)

喜藏 その次はまた浅だ。これで浅太郎三枚だ。おやありがたい、その次はまた喜藏だぞ。喜藏は三

枚だ。その次は浅太郎だ。浅太郎四枚。おやその次はまた此の俺さまだ。喜藏四枚だ。これで俺と浅太郎はたしかだぞ。おやその次が嘉助だ。

嘉助 しめた!

喜藏 これで浅と俺とが、四枚づつ、九郎助と嘉助とが一枚づつだ。二人の勝負だ。

嘉助 アト一枚だな。一寸待つてくれ、俺と出るか九郎助と出るか。

九郎助 俺だとも。なあ、きまつてらな彌助!

彌助 (黙つて答へず)...

喜藏 さあ! あけるぞ。どつちだ丁か半か。九郎助か嘉助か。あゝ、...嘉助だ。

九郎助 なに、嘉助だつて。

(九郎助身をもがいてくやしがる)

浅太郎 やつぱり、みんなは正直だ。ありがてい。やつぱり親分のためを思つてらあ。みんなありがたう。お禮を云ふぞ。親分のことは俺達が引受けた。

才助 ぢや、浅兄たのんだぜ。

忠次 ぢや、みんな腑に落ちたんだな。それぢや、浅と喜藏と嘉助とを連れて行くぜ。九郎助は一枚入つてゐるから、連れて行きていが、最初云つた言を變改することは出来ねえから、勘辨しな。さあ。先刻からえらう、手間を取つた。ぢや、みんな金を分けて、めいゝくに志すところへ行つてくれ。

喜藏 (五十兩包みをこはしながら) さあ、みんな遠慮なく取つてくれ。 (喜藏、遠慮する乾分達に分けてやる) 九郎助阿兄、何を考へてゐるのだ。われも手を出しなせえ。

え。

(九郎助、不承無承に手をさし出す)

忠次 ぢや、俺達は、一足先に立つぜ。みんな氣をつけて、行つてくれ。

一同 親分、御きげんよう。お氣をおつけなせえませ。

才助 浅兄頼んだぜ。

浅太郎 安心してゐろよ。

十藏 喜藏兄たのんだぜ。

喜藏 合點だ。親分の身體は、俺達の、目の黒い中は、大丈夫だ。

(口々に、呼びかはしながら、三人山上の方へとかくれる)

牛松 浅達がついてゐりや、ていした間違はありやしない。

才助 親分の胸の中だつて、あの三人をめざしてゐたに違えねえや。

十藏 違いねえや。あいつらをつけて置けば大丈夫だ。

牛松 さあ俺これから草津の方へ落ちてやらあ。

才助 おいらも、草津だ。

十藏 おいらも草津へ出よう。

牛松 ぢや、草津組は一しよに出かけようや。九郎助阿兄！ お前は、何處へ行くんだ。

九郎助 おいら、もう半刻考へよう。

牛松 思案は、早い方が勝だぜ。

(入れ札の紙、風にふかれて飛び立たんとす)

九郎助 あゝいけねえ、こんなものが残つてゐると、とんだ手がかりにならねえとも限らねえ。(九郎助拾ひ集めて掌中に丸める)

牛松 ぢや、稻荷の阿兄、ごきげんよう。

九郎助 もう行くのか、あばよ。

十藏 彌助阿兄、ごきげんよう。

彌助 ごきげんよう。

(みんな口々に、別れの言葉を交し、四人は最初みんなが来た方へ引つ返す。後に、九郎助と彌助と丈がのこる。九郎助の顔は、凄いほど、蒼い 黙然として考へてゐる)

彌助 おい阿兄！ お前は、どの方角へ行くんだ。

九郎助 うるせえや、今考へてゐると云ふに。

彌助 おらあ、よつぽど、草津から越後へ出ようと思つたが、よく考へて見ると、熊谷在に伯父がゐるのだ。少しは、熊谷はあぶねえかと思ふが、故郷へ歸る足溜りには持つて來いだ。それで俺武州の方へ出るつもりだが、お前はどうする氣だ。

九郎助 (黙して答へず)……

彌助 お前、よつぽど入れ札が、氣に入らなかつたのだな。もつともだ、俺も今日の入れ札は、最初からいやだつた。親分も親分だ！ 餓鬼の時から、一緒に育つたお前を捨て、行くと云ふ法はねえや。浅や嘉助は、いくら腕つぶしが強くつてもお前に比べれば、ホンの小僧つ子だ。また、たとひ入れ札をするにしたところで、野郎達がお前を入れねえと云ふ法はありやしねえ。十一人の中で、お前の名をかいたのは、この彌助一人だと思ふと、おらあ彼奴等の心根が全く分らねえや。

九郎助 (憤然として)この野郎、手前ほんたうにかいたのか。

彌助 かいたとも、俺より外にお前の名をかく奴なんかありやしねえぢやねえか。

九郎助 ほんとうに書いたか。

彌助 かいたとも、俺より外に誰がかくとおふ。

九郎助 手前、ウソをつくど叩つ切るぞ。

彌助 論より證據、お前の名が一枚出たぢやねえか。

九郎助 (先刻、丸めた中より忙しく一の紙片をよりだしながら)これを手前がかいたと云ふのか。仲間の中で能筆の手前が、こんな金くぎの字をかくか。

彌助 うゝむ。(狼狽する)

九郎助 これでもかいたと云ふのか。

彌助 阿兄、かんにんしてくれ。阿兄わるかつた！ ウソをついた俺を叩つ切つてくれ！

九郎助 (脇差に手をかける、が、すぐ思ひ返す) よさう。たつた一人の味方と思ふ手前にだつて、心
 の中では意氣地なしと見限られてゐるおれだ。手前を叩つ切つたつて何にもなりやしねえ。
 彌助 だが不思議だな。俺が、かゝないとしたら、それを誰がかいたんだらう。

(彌助紙片をみつめる。九郎助あはてゝ丸める)

彌助 誰がかいたんだらう。(ふと、氣がつく) 阿兄、まさかお前が自分でかくやうなケチな眞似はし
 ねえだらうな。

九郎助 なゝ何を云ふ。(ふと氣が變つて急に泣く) 彌助かんにんしてくれ。意氣地なしの卑怯者を、
 手前親分の代りに成敗してくれ!
 (九郎助わつとすゝりなく)

— 幕 —

澤村田之助

人物

澤村田之助

女房 おくに

弟子 蝦十郎

弟子 銀次郎

有馬屋重助

善 孝

ひいき客

吉原のたいこもち

時

明治十一年

所

浅草南千束村富士下

情景

澤村田之助の住宅の奥座敷。十畳以上の廣間。中央に田之助の病床が取つてある。

四肢を斷たれて田之助が寝て居る。女房のおくに弟子の銀次郎、蝦十郎等が病床を圍んで居る。女

房おくにがうちはで、絶えず田之助をあふいでゐる。ふとんを幾枚も重ね、頭に高き枕をさせ寝な

がら人と話せるやうになつてゐる。銀次郎箸で西瓜を食べさせてゐる。
 (芝居國の川語、特殊の言葉などは全然之を無視せり)

田之助 おい氣をつける、露がまた落ちたぢやねえか。(口調は険しいが聲低く力なし)
 銀次郎 濟みません。旦那。

田之助 濟みませんぢやねえや、てめえは一體手を何本持つてゐるんだ。

おくに 太夫、そんな憎まれ口を利くものぢやありませんよ。

田之助 憎まれ口は俺の生れつきだ。思ひ存分憎まれ口を云はねえうちは死にやあしねえぜ。

(田之助一寸苦しげに身もだえする)

おくに それ御らん、腹を立てると直ぐそんなに苦しがるぢやないか。氣をのどかに持つて下さいよ。

田之助 べらぼうめ、氣をのどかになんか持つちやゐられねえや。おいら、手も足も一本もなくても芝居がしたくてたまらねえんだ。こんなさかさまになつた龜の子のやうに放り出されてゐるなあ、何よりもくやしんだ。

おくに そんなどうとも出来ない無理を云つたつて只私達を困らせるだけぢやないか。太夫だつて今までに五人前も十人前もいゝことをして来たぢやないか。お名残狂言の時だつて堀の藝者と柳橋の藝者がほめ言葉を舞臺で言つて呉れたなんて、芝居道でも前代未聞と云ふぢやないか。太夫なんか冥利に盡きた方だよ。

田之助 だから、おいらあそんな不足を云つてるんぢやねえんだ。只芝居がしたいんだ。おいらああの團十郎の奴の鼻を明かすやうな芝居がしたいんだ。おいらあいつがのさばつてると思ふと死んでも死に切れねえんだ。

おくに それもお前、時世時節ぢやないか。

田之助 その時世時節が、おいらあ癪にさはつて。

おくに そんなことはお前病人の考へる事ぢやありませんよ。そんなことよりも氣晴しに志津葉さんを呼んで清元でも聞いたらどう?

田之助 人のすることを聞いたり見たりするなあおいら厭だ。自分で何かしたいんだ。南部先生がい義足をメリケンへ註文すると云つて下すつたがまだ出来ねえのかなあ。

おくに (だまつてゐる)

(女中が這入つて来る)

女中 あの神田の有馬屋様が入らつしやいました。

おくに これはありがたい。これで太夫の機嫌が直らうと云ふものだ。

(おくに弟子達と一緒に玄關へ出迎へにゆく。有馬屋、六十前後の太つた品のいゝ老人、先きに立つて這入つて来る。田之助それに挨拶しようとする心持ちで頭をしきりに動かす)

田之助 旦那入らつしやいませ。何時もこんなみつともない恰好ばかりして失禮いたしやす。
 有馬屋 そんな會釋が要るものか。どうだ太夫、少しやあ氣分がいゝかなあ。

田之助 相變らずでムいますよ。だが斯うして生きてる内は旦那たちのお見舞にもあづかれると云ふ譯で、それだけは樂しみにございますよ。

有馬屋 太夫が何時も喜んで呉れるので、もつと繁々来ようと思つてるんだが、この頃は商賣の方が忙しくつて、千束村ぢやあ一寸寄り道と云ふわけにもゆかねえのでな。

田之助 御尤もでございます。だが旦那の御商賣の御繁昌は何より嬉しうございますよ。旦那には澤村座でえらい御損をお掛けしましたからな。

有馬屋 何をお前そんな氣の弱い云ひ譯をするのだ、何時もの田之助さんらしくもねえぢやないか。何時もの様に今月の狂言の悪口でも聞かうぢやないか。

田之助 今月と云ふ今月には、わつしやあ、悪口も利きたくありませんや。何ですつて、西郷戦争の芝居だと云ふぢやありませんか。歌舞伎役者が、毛唐人の洋服なんぞ着て芝居をするなんざあ、舞臺で生き恥を晒すやうなもんぢやございせんかなあ。わつしや、そんな芝居をするよりも、斯うして手足をもがれて寝てゐる方が、いくら氣が樂だか分りませんや。何が九代目團十郎だ。何が隨市川だ。わつしや今度寺島でも来て呉れたらうんと云つてやらうと思つてるんですよ。西郷さん

有馬屋 人氣のおかげで、客を呼ぼうなんて、こりや役者の恥ですぜ。

田之助 わつしや旦那、人の人氣を踏みだにしたことは一度だつてありやしませんよ。ねえ旦那あれやあ明治六年でしたかね、旦那に建て、貰うた澤村座のこけらおとしでさあ。あの時はもう兩

有馬屋 うむ。尤もだ。

足ともありませんでしたねえ。唯船の中へ坐つて、拾つた文箱の中の文を讀むだけであんな大入でしたぜ。西郷さんの威勢を借りるなんて役者の恥ぢやありませんかね。

有馬屋 恥だとも、大恥だよ。だがこのごろの座元は金より他に眼が無えんだからな。

田之助 役者だつて變りはありませんよ。藝を見せるよりも金を取りたいんですよ。わつしやあ、あの堀越なんかあ、この頃では大臣參議のおやしきへ、ペこく出入りをしやがつて、それを鼻に掛

けてると云ふぢやありませんか。芝居の分らねえ、薩長の田舎者に有難てえ歌舞伎芝居見せてそれが何の手柄になりますかねえ、旦那。わつしやあ芝居は一文なしでもいゝから芝居の解る江戸つ

子に觀て貰ひてえんだ。(苦しげに息をする) わつしあ、江戸つ子に江戸の芝居を見せてやりてえんだ。それを思ふと、わつしあこんな恰好でもいゝから思ひつ切り舞臺の上をはひ廻りてえんだ。

有馬屋 尤もだよ、尤もだよ。金で自由になる事なら太夫さんの足一本手一本に一萬兩づつ出してやつてもいゝのだからな。

田之助 ありがたうございます。有難てえ。わつしやあ旦那のやうにわしの心持ちが解つて下さる方が一人でもあるうちは死なゝくてもいゝと思つてるんだ。ねえ旦那、さうでせう。

有馬屋 うん、生きてゐて貰ひ度いとも、わつしやあ、太夫の話を聞いてるだけで氣がせいゝするのだ。西郷戦争のだんまりを見てゐるよりか、よつほど助からあ。

田之助 旦那、舞臺で仕掛火花を使つてると云ふぢやありませんか。

有馬屋 それが又大相な評判だよ。

田之助 兩國の川開きだと思つてゐやがるんだなあ。それが御時世に遅れねえと云ふんですかなあ。ねえ旦那。本當の藝は時世なんか遅れるもんぢあねえでせう。さうぢやありませんか。ねえ旦那。本當の藝は何時まで立つても本當の藝ぢやありませんか。ねえ旦那、さうでせう。さうだと云つて下さい。(田之助非常に苦しげなり)

有馬屋 さうだとも、さうだとも。

田之助 ねえ旦那、わつしやあ外に望みはちつともねえんだ。たゞもう少し體がよくなつたら、死んでもいゝからもう一度、舞臺を勤めたいんですよ。一度でいゝから、這ふだけでもいゝから出て見たいんですよ。南部先生の云つた義足は何時來るのかなあ。

有馬屋 義足もいゝが内臓の方もよつぽど弱つてると云ふぢやあねえか。其の方の養生も肝心だぜ。おくに 本當にさうなんでしょう。旦那よく云つて聞かせて置いて下さいまし、食べ物の無理許り申して困るんでございますよ。

田之助 何を云つてやがるんだ。かう寝つころがつてゐりやあ、食ふより外に楽しみはねえぢやねえか。

有馬屋 尤もだ。だが、太夫あんまり食ひ過ぎて胃腸をこはしたりなんかすると、只さへ弱つてる體を一倍悪くするやうなものだからな。氣をつけて養生して、もう一度俺たちのやうなひいき客に、やんやと云はせて呉れ。

田之助 (うれしきうに) がつてんです。がつてんです。今に屹度快くなりますぜ。今度舞臺へ出る

ときは女勸進帳をやりませう。わつしやな本所の師匠に頼んで勸進帳のふを張る女勸進帳を書いてもらひますよ。そして堀越の奴の鼻を明かしてやりてえんです。田之助苦しげに息する。

有馬屋 いつも聞いてゐるが、趣向だよ。西郷戦争なんか、ぶつ飛ばして了ふ狂言だよ。

田之助 苦しげに息をしてゐる。(田之助苦しげに息をしてゐる) おくに 太夫、お前、今日あんまりしやべりすぎてるやうだよ、晩にまた熱が出るといけないから

田之助 何、大丈夫だ。折角、有馬屋の旦那がいらしつてゐるんだ。おいらのしやべれるだけ、しやべつて、しやべり溜めておきたいよ。

有馬屋 はゝゝゝ。

おくに 本當に旦那がいらつしやつて下さると、甦つたやうに元氣がよくなるのでございますよ。旦那がいらした當座二三日は本當に機嫌がよくて、みんなが大助かりなんでしょう。

有馬屋 さうかね。そいぢやあもつとせいゝ来る事にしようよ。

おくに 本當にお忙しいのに御迷惑でございませうね。

有馬屋 何の迷惑なものか。わしも太夫さんの顔を見て昔のことを思ひ出すのも楽しみだからなあ。

(右側の障子を開け、たいこ持の善孝あわたゞしく這入つて来る)

善孝 太夫さん今日は。(有馬屋のゐるのに氣がついて) 有馬屋の旦那もいらつしやるんですか、それやあ丁度いゝ。

有馬屋 どうしたんだい、何か出来たのかい。

善孝 旦那、わしやあ、今日程口惜しい事はねえんですよ。わつしや口惜しくつて、口惜しくつて、腹が立つて、腹が立つて、昨夜は一時頃から一ね入りも出来ねえんですよ。

有馬屋 どうしたんだ、どうしたんだ、わけを云つてみる。

善孝 旦那、わつしやなあこれを太夫さんのお耳に入れようか入れまいかと、考へたのですがね。わしやあ、あんまり腹が立つて口惜しいから何もぶちまけて申しますがねえ。

田之助 (殺氣立ちて床の中に身を動かしながら) あゝ云つて呉れ。云つて呉れ。

善孝 實は、わしは昨夜角海老へ行つてゐたのでございますよ。木場の旦那衆のお座敷でございまして。すると十時過ぎに九代目がお見えになつたのでございますよ。

田之助 うむ。

善孝 すると四方山の話のついでに、旦那衆の一人が九代目さんに、おい田之助は此頃どうだいとお聞きになるぢやございませんか。

田之助 (うなる) うゝむ

善孝 すると九代目さんが、まだ生きてゐるやうでございませよ、と斯う云ふぢやあございませんか。

田之助 (漸を喰ひしぼる) ……

善孝 わつしやあ、それだけでもカチンと來たんですよ。處が其のあとがとても辛抱が出来ねえんで

す。

おくに 善孝さん、お前つまらないことを言つてお呉れでないよ。

田之助 馬鹿を云へ、だまつてろ。善孝云つてお呉れ。おいらあ首が飛んでも聞くぞ。

善孝 太夫さんも、旦那も聞いて下さい。そのあとで九代目さんがかう云ふんですよ。「どうもあれにも困つたものでございますよ。あれひとりがあるために、役者はみんな、あんな因果なものと思つてゐるのも口惜しいから、一層早く死んで呉れるがいと思つてゐるのでございます」とかう云ふぢやあございませんか。わしやあ旦那衆さへるなかつたら、九代目さんの頭を一つくらはしてやり度い位、腹が立ちましたよ。

田之助 (極度に激昂する) そんなことを云つたか。ほんたうに云つたか。(田之助床中に身をもだゆる)

おくに 善孝さん、お前飛んでもない事を云つてお呉れだね。

善孝 濟みません。だつて口惜しいぢやありませんか。

田之助 おゝ、善孝、よく云つて呉れた。よく云つて呉れた。口惜しい、口惜しい。堀越の野郎奴、誰か行つて彼奴を呼んで來て呉れ。

有馬屋 口惜しいなあ、もつともだ。だが仕返しの様はあるよ。わしがきつと見つけてやるよ。今いきり立つても仕様の事だよ。

田之助 いや、今呼んで來て貰ひたいのだ。わつしやあ一時も辛抱がならねえのだ。

(田之助眞蒼になりて激昂する)

おくに 太夫さん氣を沈めてお呉れ。お前がそんなに腹を立てるのは却つて自分で身を亡ぼす様なものぢやないか。後生だから静まつておくれよ。

田之助 死んでもいい、死んでもいいから堀越を呼んで来て呉れ。俺は彼奴に、一言、云つてやらねえ。うちには死に切れねえのだ。何が因果だ。何が因果だ。役者が舞臺の怪我から、かたはになるのが何が因果だ。西郷さんになつて、サアベルをつるす方がどんなに因果の恥知らずだか解らねえのだな。(田之助うめきながら苦しがる。低く) 彼奴には。あゝ苦しい、苦しい。

おくに それ御覽なさい。腹を立てるから苦しいんですよ。

銀次郎 親方、かんべんして下さい、この恨みは屹度おれたちが晴しますから。

蝦十郎 さうですとも。そんな事を本當に云つたのならわしやあ、杉山半六のやうに舞臺の上で九代目さんにきつと仇をして見せますぜ。

田之助 (半ば狂せる如く) 手前達のやうな意氣地なしに何が出来るものか。それよりも彼奴をこゝへ呼んで来い。銀次郎、蝦十郎、行つてこゝへ呼んで来い。

有馬屋 そりやあ無理だよ。平生から仲違ひのお前の家へ只で来るわけはねえよ。

田之助 うゝむ、(うめき乍ら考へる) あゝ、わしはいゝ趣向がついた。一世一代の狂言だ、彼奴の家へ行つて、今澤村田之助が息を引き取つたと云つて呉れ。さう云へばいくら不人情のあいつだつてかけつけて来ねえ譯はねえ。おいらあ、死んだふりをして待つてゐて、彼奴が来たら、はね起きて

うんと恨みを云つてやるんだ。あゝ、苦しい苦しい。(うめく)

胸が苦しい。

有馬屋 おい太夫氣を静めて呉れ。

(おくに泣き出す)

おくに 太夫さん後生だから氣を静めてお呉れ、そんなあざとい狂言が出来ものかね。

田之助 いや、呼んで来い。呼んで来い。銀次郎、行つて来い。行つて来い。行つて来い。俺は死んだ眞似をして待つてゐる。俺はふとんを被つてゐる。

(田之助、もだえながらふとんを被る。苦しいうめき聲だけが續く。有馬屋、おくにに耳打ちする。)

おくにうなづいて銀次郎に耳打ちする)

有馬屋 ぢやあ、銀次郎、太夫がせつかくあゝ云ふのだからお前行つて来い。あまり、世間を騒がせないやうにな、いゝかい。

銀次郎 かしこまりました。ぢやあ太夫、行つて参ります。

有馬屋 人力で行つておいで、九代目さんへもちやんと人力を用意するんだぜ。

銀次郎 かしこまりました。ぢやあ太夫、一寸行つて参ります。

田之助 (うめくやうに) うゝむ。

(田之助、床の中でもがいてゐる)

おくに 太夫さん、お前苦しくはないかい。

田之助 (低い聲でうめくやうに) 話し掛けて呉れるな。おいらあ死んだ眞似をしてゐるんだ。

——時間の経過を示すために、カーテンを一時下してすぐ上げる——

前より一時間位経つてゐる。田之助ふとんを被つたまゝでゐる。

おくに、有馬屋、善孝など稍々退屈したらしく坐つてゐる。

おくに お退屈のやうでございませうから、一口差し上げませうか。こんな病人の前ではおいしくも
いませんでせうが。

有馬屋 そんなこともありませんが、今夜は御遠慮しませう。

善孝 どうしたんでございませう。使ひの銀次郎さんは遅うございますね。

有馬屋 もう新富座はとづくにかぶつてゐるのだから、堀越さんはうちにある筈だがな。

善孝 (一寸田之助の方を見乍ら) うまく引つぱり出されて来るといふのでございませうがね。

有馬屋 あはゝゝさうだな、うまく引つ張り、されて来るといふんだがな。(一座はしばらく無言。や
がて襖や障子の開く音がして、銀次郎、あわたゞしく歸つて来る)

有馬屋 お、銀次郎か、行つて来たか。

銀次郎 行つて参りました。

有馬屋 どうだ。堀越は居たか。

銀次郎 それが残念ながら御他出で御ざいました。

有馬屋 そいつあ、残念だが仕方が無え。おい太夫さん、太夫さん——。按排よく寝たやうだね。起

すのは止さうか。

おくに でも眼が醒めて怒るといけませんから起しませう。ねえ太夫さん、太夫さん。

(おくに、ふとんに近よる)

有馬屋 あんなに、おこつてゐながら寝るとは面白い。矢つ張り名人肌だな。そこが太夫の身上だ。

(おくに呼びつゞける)

おくに 太夫さん、太夫さん、もし、太夫さん。

善孝 ひどく寝込んでしまつたもんですね。

おくに (急に悲鳴をあげる) あ——。あゝつ——。

有馬屋 どうしたんだ、どうしたんだ。

おくに (おろろく聲で) 旦那いけません、冷たくなつてゐます。

有馬屋 なんだと。

善孝 何んですつて。

(みんな田之助に近よる)

おくに どうしませう。どうしませう。もうすつかり冷たくなつてゐますよ。

有馬屋 なるほど、こいつあいけねえ。さつき苦しがつた時に息を引き取つたんだな。

善孝 とんだことになりました。濟みません。濟みません。太夫。濟みません。……(死屍に向つて
手をつく)

おくに 太夫さん、太夫さん、太夫さん。

(泣く)

有馬屋 可哀相に、あんな思ひをさせ乍ら殺したくはなかつたなあ。

善孝 濟みません。みんな私に至らないからです。

有馬屋 いやあ、こんなことが無くつても長くは無い人だ。みんな此の人の生れつきがさうなつてゐるんだ。おい銀次郎、こん度は本當に方々へ通知して来い。紀伊國屋さん、三河屋さん、音羽屋さん、橋屋さん、それから成田屋さんへもやつぱり、行つて来た方がいゝだらう。

(おくに、はげしく泣く)

—幕—

仇討出世譚

人物

立石 伊織
その娘楓

葉田 與七郎
その弟時之助

小伴 新四郎
その子新之丞

大石 半九郎
その弟半三郎

久志 小左衛門
その子澤之助

時

萬治の頃

第一幕

第一場

所

但島、出石の郊外

情景 神社の玉垣を延見する森の中。老杉が多い。十間ばかり彼方に一際秀れた大樹が見える。地上から、一間位上に注連縄がはり渡してある。神木であることが分る。地上には屋花や女郎花が咲いてゐる。百舌鳥の聲が、けたましく聞える。小伴新四郎と葉田與七郎とが、連れ立つて梢の鳥を探してゐる。葉田與七郎は、半弓を手にしてゐる。

小伴 おゝ居たぞ。居たぞ。

葉田 何處だく。

小伴 ほら！ あすこだ。見えんか。もつと此方へよつて見ろ。

葉田 見えん。何處だ何處だ。

小伴 あれが見えんか。ほら、あの大きい枝と幹との分れ目を見ろ。

葉田 なるほど、ゐたく。何だ、白鷺ぢやないか。

小伴 白鷺たつていゝぢやないか。

葉田 よし、俺がやらう。

(矢をつがへる)

小伴 茲からは、少し遠いぞ。

葉田 もつと近よつて見ようか。

(葉田、二間ばかり近寄る。すぐ引返す)

葉田 いやいかん。矢頃を近くすると見えなくなる。茲から、やる。

小伴 茲からでは遠いぞ。當らないぞ。

葉田 えゝかまふものか。(きりゝと引しぼる)

(立石伊織、四十位の年配、武士らしき品位と物ごし、いつの間にか二人の後に立つて居る)

立石 よしなされ、葉田氏、(ニコノ、笑つてゐる)

葉田 (おどろいて振り返る) 何だ！ 伊織殿か、なぜお止めなさる。

立石 御覽なされ。あの杉には注連縄を張つてあるではないか。神木に矢を引く咎め、恐しいぞ。

葉田 神木！ 馬鹿なことを云はれるな！ それよりも身共が手練を御覽なされい！

(與七郎切つて放つ。矢は杉の梢に飛ぶ。が、鳥には當らない。白鷺がゆつくり飛び立つ！)

葉田 ちえつ！ しくじつた！ 残念！

立石 それ御覽なされ！ 神木に止まつてゐるものに、矢が立つ筈はない。

葉田 馬鹿な！ 貴殿がケチをつけるからぢや。

立石 あはゝゝ、御身の下手な腕前の尻を此方へ持つて来るなよ。あはゝゝ。

葉田 あゝいまくしい。

小伴 貴殿なぜ、此邊を一人でウロ／＼してゐる。

立石 散策だよ。

葉田 嘘を云ふな。大方、此の邊で若衆とでも落ち合ふ約束があるのだらう。

立石 あはゝゝ、阿呆なことを申すな。此立石には、そんな色めいた筋はないわ。

小伴 逸れた矢を探しに行かうか。
 葉田 おけ！ 見つかるまい、
 小伴 茲は駄目だ。朝子山の方へでも行かうか。どうだ、立石氏同行せぬか。
 立石 又にせう。

(立石、二人と別れて去らうとする。そのとき、矢のそれて行つた杉林の奥から久志小左衛門が、逸散に走つて来る。血相が變つてゐる。見ると、右の手に、今與七郎が放つた矢を握つてゐる。しかも、その矢じりは黒く血に染んでゐる)

久志 (與七郎につか／＼と進み寄りながら) 今此の矢を射たのは貴殿か。

葉田 (駭きながらも、決然と) いかにも拙者。

久志 しかと貴殿か。

葉田 念には及び申さぬ。只今樹上の白鷺に放つた矢に相違ござらぬ。

久志 然らば、改まつて申す。此の矢先にかゝつて、同伴の大石半九郎、相果て申したぞ。

葉田 えゝつ！

立石、小伴 えゝつ！

葉田 それは實證か。

久志 何を偽り申さう。
 葉田 念のため、半九郎の御容子見分いたす。

第二場

久志 それは、御存分に。その上での御覺悟はござらう。
 葉田 御念には及ばぬ。
 小伴 拙者とても逃れぬかゝり合、覺悟がござる。
 久志 然らば、御案内いたす。

(久志先に立つ)

葉田 立石氏、御覽の通りの次第ぢや。半九郎殿の最期見届けた上からは、われ等は久志殿と自然打ち果し申さう。貴殿、御迷惑ながら、御立合下さらぬか。

立石 よろしい。一緒に參らう。

(四人打ち連れて森の奥に這入る)

森の奥。薄が亂れ咲いてゐる中に、大石半九郎が倒れてゐる。

前場の四人急ぎ足に登場。皆、半九郎の死骸に走り寄る。

葉田與七郎、手傷をしらべ、手に口をあてゝ見る。

久志 葉田氏、とくと御覽なされたか。

葉田 いかにも。

立石 急所の深手、何ともはや、申様ない出来事。
久志 葉田氏、此始末何となさるゝ。

葉田 (死骸を離れて立ち上りながら) 拙者心に覺なき事とけ云ひながら、貴殿御了簡に従ひ申す。
久志 さすがに聞えた申分ぢや。貴殿に意趣なき事明なれども、拙者半九郎死骸を闇々と持ち歸りては、彼の兄弟縁者に一分立ちがたし。互に、不祥な事ながら打ち果す外ござるまい。

葉田 道理ぢや。

久志 御用意なされい！

葉田 心得た！

(二人とも戦闘の用意をする。刀を抜く、立石、小伴、茫然と見てゐる)

久志 (二三度、刀を打ち振りながら) 小伴氏、立石氏、お助太刀は御隨意に。

葉田 いや、立石氏は、ほんの通りがかり。我等矢を放ちしよりの仔細、御覽なされたれば、立合にお願ひしたのぢや。小伴氏とても、拙者、息ある中は、助太刀堅く無用。

立石 拙者、最初よりのいきさつ、御二人が武士を立てなされた始終、目付衆へ申し出るゆゑ、安心してお立ち合ひなされい！

葉田 心得た。然らば久志氏！

久志 おう！

(二人激しく切り合ふ。與七郎の打ち込む太刀を拂つた小左衛門の刀はそのまゝ斬り返されて、與七

郎の小びんをかすかに拂ふ。傷きながら、打降した與七郎の刀が、小左衛門の肩をかすめる。血を見ると、二人の争ひは必死になる。だが、ともすれば、與七郎の太刀筋が亂れる。小伴が、助太刀の用意をする。やがて、與七郎は敵の刀を受け損じて肩先を三寸ばかり斬り下げられ倒れる。小伴

新四郎。刀を抜き久志に斬りかゝる)

小伴 助太刀御免！

久志 心得た！

(十數合。小左衛門も新四郎も、薄手深手数ヶ所負ふ。葉田與七郎は、いつの間にかこときれてゐる。新四郎が蔦草に足をとられて倒れる。もう起き上る力がない。小左衛門も、それに近寄らうとするが、身體が動かない。これも、瀕死の傷を負うてゐる。立石、久志に近づく)

立石 久志氏、始終のなされ方、天晴ぢや。仔細、目付へはもとより、大石氏御家族、貴殿御家族にお傳へ申すであらう。

(久志は、うなづいてこと切れる。立石は、今度は、小伴新四郎に近づく。新四郎を抱き起す)

立石 小伴氏、氣をたしかに。

(新四郎も、ほとんど息が絶えかゝつてゐる)

立石 小伴氏！ 見事ぢや！ ようなされた！ 仔細、御家族に傳へようぞ。

(小伴かすかにうなづぎ、息が絶える。そのとき、大石半九郎の仲間六助水を汲みに行つたのが、竹筒に水を汲みながら、歸つて来る。此の場の容子に駭いたが、刀を抜くと、いきなり立石の背後よ

り斬りかける。立石危く身をかはす)

六助 旦那さまの敵。

立石 理不盡な、人違ひぢや。

六助 おゝ、逃さぬ。

(立石危く二の太刀を避ける)

立石 えゝ、人違ひだと申すに。

六助 えゝ、卑怯者め!

(六助、はげしく斬りかける。立石、左手をかすかに斬らる)

立石 なに卑怯者とは、堪忍ならぬぞ。

(彼は、六助の刀を奪ひ取ると、一氣に斬り倒す)

立石 (自分の短慮に、氣がつく) しまった! これでは立派な助太刀だ。荷擔人になつてしまった。

もう立合人ではなくなつた。(ちつと考へる) 含み狀をして腹を切るか。だが、それは犬死だ。こんな小者を手にかけた。仔細をかき置いて國を出よう。逃げて心にもやましいことは、少しもない俺だ。

(立石、思ひ返すと、四邊を見廻して歩み去る。入れ違ひに、大石の弟半三郎が、かけつける。兄の死骸を見て仰天し、ついで久志の死骸を改め、最後に六助を抱き起す。六助はまだ息が通つてゐる)

半三郎 これ、六助氣をたしかに。仔細をかたれ! 仔細を。

六助 (口をうごかさんとして言葉が出でず) ……

半三郎 兄上を討つたは誰ぢや。相討か、外に敵はないか。どうぢや、どうぢや。

六助 (何か話さんとして口をうごかす) ……

半三郎 氣をたしかに、兄上の敵は誰ぢや。

六助 たて……

半三郎 何! たて……たて……

六助 たていし……

半三郎 立石! 立石誰ぢや。立石伊織か。

六助 (うなづく) ……

半三郎 それに間違はないか。兄上を討つたのは、立石に相違ないか。

六助 (うなづく) ……

半三郎 その立石は、どうした逃げたか。

六助 (うなづく) ……

半三郎 ちえつ、残念! 一足違ひだつた。

(くやしがる)

第二幕

第一場

河内國龍田越の茶店。

萬治三年春の暮。藤棚の藤は一杯に咲いてゐる。茶店の床几に、葉田與七郎の弟時之助と小伴新四郎の一子新之丞とが、一緒に腰かけてゐる。

新之丞は、角を入れた前髪、二十に近い。時之助は二つ三つの年若。

新之丞 半三郎や澤之助は、まだ見えぬなう。

時之助 一緒に旅をして居ても、敵同志であることが、此頃はハッキリと分つて来るやうぢや。

新之丞 うむ。いつも云ふ事ぢやが、御邊の父者や拙者の兄が、立石殿に討たれる筈はない。

時之助 さうとも、立石殿が國許を立退かれるとき書残された通、われらの父者や兄は大石殿や久志氏と打ち果されたに違ひない。

新之丞 大石殿の仲間六助が、末期の言葉丈で、立石殿を敵と思ふのは笑止ぢや。

時之助 立石殿に廻り合へば、事はハッキリ解るのぢや。

新之丞 久志や大石と敵同志であることが分つたら、どうする。

時之助 その場を去らず、斬り結ぶまでぢや。

新之丞 久志や大石も、その事が此頃は漸く分つたらしい。卑怯者の彼等ぢや、吾等の寢首を狙つて

あるかも知らぬぞ。

時之助 あはゝゝゝ立石伊織、われらは敵を狙うてゐるのではなうて、伯父貴でも尋ねてゐるやうな

氣がする。

新之丞 御身と、伊織殿息女とは、約婚との噂を聞いたが。

時之助 それは、一向存ぜぬ。なれど楓殿も。今年十六か……。

新之丞 あはゝゝゝ、時々は思ひ出すと云ふのか。

時之助 埒もないことを云はれるなよ。

(二人は笑ふ。その時、峠の下から大石半九郎の弟半三郎と久志小左衛門の一子澤之助とが、旅姿で出で来る。編笠を手にしてゐる。床几に腰かけてゐる前の二人に近づく)

半三郎 何だ！ また休んでゐるのか。

時之助 休んだが悪いか。遊山半分の旅ではないぞ。

半三郎 藤井寺で、晝食を使つたときあんなに休息をしたではないか。

時之助 と云つて、先を急ぐ旅ではない。

新之丞 今夜は、麓の宿で宿ればよいのぢや。

澤之助 悠長なこと云はれるな。まだあんなに日が高い。壺坂まで行かねばならぬ。

新之丞 そんなに先を急いで、何になる。何時何日に、何處まで行かねばならぬと云ふのではない。敵討の旅に先をいそぐは無用ぢや。敵は、案外この邊に居ようも知れぬ。

半三郎 そのやうな心掛なればこそ、まだ敵が討てぬのぢや。國を出て二年になるに、まだ日本半國廻れぬのぢや。

新之丞 日本全國六十餘州を廻り切つたら、敵が打てる保證があるか。

半三郎 茶店の床几にのんびんだらりと腰かけてゐるよりも、保證があるか。

新之丞 何を！
澤之助 まあ、いゝ。まあいゝ。だが、新之丞どの、彼是と口實を作つて、身の足場をかくされるな。

新之丞 なに、足弱！ 貴殿こそ、米子から津山へ出る四十曲の山坂へかゝつたとき、足を痛め、身共の肩にかゝつたのを忘れたか。

澤之助 何を！
新之丞 敵の在所さへ分れば、三十里四十里は、一飛びにでも飛んで行く。わかりもしない敵に、先を急いで何になる。
澤之助 御身達が、急がなければ拙者丈でも急ぐ。大和路へ這入つて、今日で幾日になると思ふ。故郷を出てからも、二年と三ヶ月ぢや。我等は敵を打つに心が急がれるのぢや。悠長な、其方達と同伴は所詮無用ぢや。今日からは、別々にならう。なう、大石氏。

半三郎 道理ぢや、毎日愚圖々々いがかみ合ふよりも分れた方が、せいゝする。

時之助 別れる？ 別れるのは此方が、不承知ぢや。

半三郎 何ぢやと。立石伊織に逢つて委細が分れば、拙者等の敵は、立石殿でなくて御身達かも知れぬのぢや。

時之助 それは、此方も覺悟をしてゐる。

半三郎 それ見ろ、お互に敵同志かも知れんではないか。立石殿に逢ふまでは、お互に取り逃がして

新之丞 はならんのぢや。立石に逢ふまでもない。望みとあらば、今でも立ち合うてやる。刀を抜け！ 用意せい！

半三郎 立石に逢ふまでもない。望みとあらば、今でも立ち合うてやる。刀を抜け！ 用意せい！

時之助 何を。何を。

新之丞 まてゝ、今斬合うて死ねば犬死ぢや。立石殿に逢うて、理義を質してから潔く斬合ふ。

半三郎 えゝ面倒な待遠しい。

時之助 待遠しい？ 拙者の太刀先にかゝるのが、それほど待遠しいか。

半三郎 何を！

澤之助 お待ちなされ半三郎どの。問答無益ぢや。立石に逢ふまで、堪忍なされ！ 立石に逢へば、

何事も片がつくのぢや。何事も片がつくのぢや。其處へ氣がつけば重疊ぢや。敵討の旅は、たゞ辛抱に在りと、昔から定ま

新之丞 (冷笑しながら) つてゐるのぢや。

半三郎 あゝ、じり／＼する。

澤之助 まあ、いゝ。

時之助 此方こそ、じり／＼するわ。

(半三郎と澤之助、前の二人とは別な床几に腰かける。茶屋の女房茶を汲んで二人にも出す。そのとき、峠の下から一挺の女乗物が、上つて来る。四十位の町人風の男が付き添つてゐる)

茶屋の女房 どうぞ、休んでおいでなさいませ。

駕籠の者 旦那、休ませて下さい。

附添の男 よからう。少し休んで行かうか。でも、壺坂までは、いく程もなからうな。

駕籠の者 大丈夫でございます。まだ日の在る中に、向へつきます。

附添の男 やつと、これで重荷が下りた。

(茶屋の女房茶を汲んで、皆に出す。乗物に近づく)

茶屋の女房 どうぞ、お茶を一つお上りなさいませ。

附添の男 お嬢さま。一寸降りて御休息なさりませぬか。よい景色でございますぞ。

駕籠の中の聲 いゝえ。

附添の男 お疲れではございませんか。

駕籠の中の聲 いゝえ。かまうて下さるな。

茶屋の女房 お茶など一つ召上りませ。

(駕籠の中の女、簾を半かゝげ、白き手を出してそれを受ける。以前の若衆達。若き女性のけはひを感じ、一齊に駕籠の中を注視する。ふと、駕籠の中で鈴の音がする。一疋の狎が走り出る)

駕籠の中の聲 玉よ。出るのではないよ。玉よ玉よ。

(狎、振り向かず、駕籠をはなれる)

茶屋の女房 可愛い狎でございますな。

駕籠の者 狎も、駕籠の中ぢや窮屈だらう。小便をしたいのぢやございませぬか。

駕籠の中の聲 はやく捕へてたも。

(狎、いつの間にかちよこ／＼走り、新之丞の坐つてゐる床几の所へゆく。新之丞、手であやす)

新之丞 おゝ可愛い狎ぢや。(抱き上げる)

茶屋の女房 どうぞ、此方へ下さいませ。

(新之丞、女房に手渡す。時之助鋭くその狎を見入る。女房駕籠の中に狎を入れる)

附添の男 どうだ、少し早いやうだが、もう一息やつて貰はうか。

駕籠の者 合點ぢや、さあ相棒もう一息やらう。

他の駕籠の者 合點ぢや。

(附添ひの男茶代の鳥目を拂ふ。駕籠をかき上げて去る。時之助、ぢつと、その後を見てゐる)

新之丞 時之助どの、どうしたのぢや。

時之助 あの狎、たしかに見覚えがある。

新之丞 何ぢやと。
 時之助 伊織どの息女楓どのが、祕藏した狎に相違ない。
 新之丞 然らば、駕籠の中は楓どのか。
 時之助 さう思はずにゐられない。
 半三郎 (飛んで来て) 何に、あの駕籠の中が、伊織の娘か。つゞけ、小伴氏。
 澤之助 合點ぢや、(走り出す)
 新之丞 おい！ 待て、つけるのなら、一緒ぢや。殊に、大事な手が、りを見つけた時之助こそ、先達ぢや。義理を知れ！
 半三郎 と申して……。
 新之丞 あわてるな、つけるなら、一しよにつけよう。さあ時之助どのお立ちなされ！
 時之助 (やゝ憂鬱になりながら) うむ。つけようか。
 (四人先を争ひながら、駕籠の後をつける)

第二場

壱坂の山の奥、立石伊織の佗住居の垣外。花の殆ど散りつくしてゐる山櫻が二三本ある。竹垣の中には藁屋の棟が見える。門は見えない。駕籠かきが、空駕籠を吊して去ると、四人の若武者達

が、一人一人忍び寄る。銘々、垣からのぞく。
 新之丞 どうぢや、伊織に相違ないか。
 時之助 たしかに伊織どのぢや。
 半三郎 わしは、見覚えはないのぢやが、しかと相違ないか。
 時之助 相違ない。
 半三郎 澤之助どの、それ御用意！ (半三郎と澤之助、一しよに飛び込まうとする)
 時之助 何を。お待ちなされ！
 半三郎 敵を見ては、一刻も猶豫がならうか。
 時之助 今更此期に及んで、何をあわてるのぢや。
 半三郎 あわてはせぬ。だが、悠長に構へる必要はない。
 新之丞 え、待てと云へば待て。あれ見られい、久し振りに父と娘の對面ぢや。半時の猶豫を興へるのは、武士の情ぢや。
 時之助 何と申す、三年越し尋ねる敵を見つけて、入らぬ仁義立てから猶豫をいたし、萬一取り逃がせば末代までの不覺ではないか。
 時之助 え、人の情を知らぬ奴、あのやうに欣んでゐる親娘を今半時欣ばせたとして敵討の邪魔にはならぬ。
 半三郎 え、悠長な、そのけ！

澤之助 ならぬ。

(四人激しく争ふ中、半三郎柴垣を押し破つて這入る。澤之助もつゞく)
時之助 え、聞きわけのない。仕方がない、新之丞どの、遅れるな。
新之丞 心得た。

(二人ともすばやく垣の中に飛び入る)

第三場

伊織の佗住居の座敷。伊織縁側に對面したばかりの娘をかばつて立つてゐる。四人の武士伊織に迫つてゐる。半三郎と澤之助は抜きつれてゐる。

伊織 何奴ぢや。案内も乞はずに理不盡な!

半三郎 云ふな立石伊織、御邊に見覚えはあるまいが、拙者は大石半九郎の弟半三郎。

澤之助 拙者は、久志小左衛門の一子澤之助。

半三郎 兄の仇。よも忘れはいたすまい。

澤之助 父の仇、尋常に勝負いたせ!

伊織 (苦笑しながら黙つてゐる) ……

時之助 お、立石の伯父上、拙者は葉田時之助。

伊織 (なつかしきさうに) お、御身は、時之助か、大きくなつたなう。

時之助 伯父上も、御健勝で。

伊織 そちは、何用あつてこゝへ訪ねて來た。

時之助 伯父上、仔細はかうぢや。伯父上が目付へ遣した御書状は、あれは本當でございますか。

伊織 武士の書き遣したるものに偽りがあるものか。

時之助 なれど、その場に手を負うてゐた大石殿の御家來の口からは、大石半九郎の敵は立石殿とは

つきり申されました。

伊織 うゝむ、なるほど。

時之助 大石殿の敵が立石殿ならば、一緒に居られた久志殿の敵もやはり立石殿、かやうに決定いた

しました。

伊織 うゝむ、それで。

時之助 こゝに居られる大石半三郎殿、久志澤之助どの、伯父上を敵と狙うて、仇討に出られます。拙者も小伴新之丞殿も、父兄を殺されてやつぱり安閑としては居られませぬ。

伊織 うゝむ。うゝむ。

時之助 私や新之丞どののは、伯父さまが敵とは思へませぬ。だが、大石殿御家來の云ふことが本當で

ございませうか。

伊織 (ちつと考へる) 其方が、久志小左衛門の御子息か。

澤之助 (刀を擬しながら) いかにも左様。はやう御支度なされい。

伊織 其方が、大石半三郎どのか。

半三郎 (刀を振りながら) いかにも左様、早く尋常に立合はれい。

伊織 見渡したところ、いづれも頼しき若者ぢや、お身達の父や兄も、あつぱれ武士だつた。お身達も、父や兄に恥ぢぬわ。だが、拙者の書き残したことが、本當ならば何とする。

時之助 本當なれば、敵は伯父上でなうて大石殿久志殿ぢや。

伊織 半三郎殿は、何うする。

半三郎 われらは、われら仲間の申せしことを信ぜぬ譯には參らぬ。御身を打ち果した上、葉田氏小伴氏と打ち果す所存ぢや。

時之助 伯父上、はつきり云うて下されい。伯父上の云ふことが本當ならば、伯父上の助太刀して大石氏、久志氏と潔く勝負いたします。

伊織 御身達の父や兄は、武士の意地から惜しき命を捨てた頼もしい武士ぢや。それにまた御身達がその惜しい最期を習はうとするのか、まだ二十にも足らぬ若い身空で。

半三郎 立石殿、未練であらう。お支度なされい!

伊織 よし、今仔細を聞かしてやらう。あの書置きは、悉く偽はりぢや。まことは、はしなき争論から其方達父や兄を、悉く手にかけては、かく申す立石伊織ぢや。

半三郎 うむ、さては正しく。

澤之助 ぬかるな、半三郎どの。

伊織 (娘に) そちはあちらへ參つて居れ。高が知れた小忒ども、立ちどころに打ちとつてくれる。そちは、彼方へ行つて居れ。(泣き崩れてゐる娘を奥へ入れる)

時之助 伯父上、それは本當でござりますか。

伊織 此の期に及んで偽りを申さうか。その方達の父兄を手にかけて伊織ぢや。見事、父兄の仇を報じて國許へ錦をかざれよ。

半三郎 參るぞ。

伊織 (刀の鞘を拂ふ) よし。何處からでも來い。

(半三郎と澤之助、兩方より斬り込む。見事に拂はれる。時之助と新之丞はまだ刀を抜かない)

伊織 時之助、臆したか。早く刀をぬけ。新之丞どのもおかゝりなされ。

(半三郎と、澤之助激しく斬り込む。また散々に斬り拂はれる)

時之助 伯父上、貴君がわれらの父を手にかけてとは思へませぬ。

伊織 え、不覺人め、敵打に出たものが、敵を打たないで歸參が叶ふと思ふか。はやう、刀を抜いて斬つて來い。父の敵を打つて、家督相續なし、天晴武士となれよ。

澤之助 えい。(斬り込んで來る)

伊織 うむ 見事な腕の冴えぢや。父小左衛門の太刀先にも劣らぬぞ。

澤之助 何を。

澤之助 (刀を擬しながら) いかにも左様。はやう御支度なされい。

伊織 其方が、大石半三郎どのか。

半三郎 (刀を振りながら) いかにも左様、早く尋常に立合はれい。

伊織 見渡したところ、いづれも頼しき若者ぢや、お身達の父や兄も、あつぱれ武士だつた。お身達も、父や兄に恥ぢぬわ。だが、拙者の書き残したことが、本當ならば何とする。

時之助 本當なれば、敵は伯父上でなうて大石殿久志殿ぢや。

伊織 半三郎殿は、何うする。

半三郎 われらは、われら仲間の申せしことを信ぜぬ譯には參らぬ。御身を打ち果した上、葉田氏小伴氏と打ち果す所存ぢや。

時之助 伯父上、はつきり云うて下されい。伯父上の云ふことが本當ならば、伯父上の助太刀して大石氏、久志氏と潔く勝負いたします。

伊織 御身達の父や兄は、武士の意地から惜しき命を捨てた頼もしい武士ぢや。それにまた御身達がその惜しい最期を習はうとするのか、まだ二十にも足らぬ若い身空で。

半三郎 立石殿、未練であらう。お支度なされい!

伊織 よし、今仔細を聞かしてやらう。あの書置きは、悉く偽はりぢや。まことは、はしなき争論から其方達父や兄を、悉く手にかけては、かく申す立石伊織ぢや。

半三郎 うむ、さては正しく。

澤之助 ぬかるな、半三郎どの。

伊織 (娘に) そちはあちらへ參つて居れ。高が知れた小忒ども、立ちどころに打ちとつてくれる。そちは、彼方へ行つて居れ。(泣き崩れてゐる娘を奥へ入れる)

時之助 伯父上、それは本當でござりますか。

伊織 此の期に及んで偽りを申さうか。その方達の父兄を手にかけて伊織ぢや。見事、父兄の仇を報じて國許へ錦をかざれよ。

半三郎 參るぞ。

伊織 (刀の鞘を拂ふ) よし。何處からでも來い。

(半三郎と澤之助、兩方より斬り込む。見事に拂はれる。時之助と新之丞はまだ刀を抜かない)

伊織 時之助、臆したか。早く刀をぬけ。新之丞どのもおかゝりなされ。

(半三郎と、澤之助激しく斬り込む。また散々に斬り拂はれる)

時之助 伯父上、貴君がわれらの父を手にかけてとは思へませぬ。

伊織 え、不覺人め、敵打に出たものが、敵を打たないで歸參が叶ふと思ふか。はやう、刀を抜いて斬つて來い。父の敵を打つて、家督相續なし、天晴武士となれよ。

澤之助 えい。(斬り込んで來る)

伊織 うむ 見事な腕の冴えぢや。父小左衛門の太刀先にも劣らぬぞ。

澤之助 何を。

伊織 えい。(横に拂ふ)

(半三郎と澤之助、奮闘すれども及ばず)

伊織 え、時之助、刀を抜かぬか、うろたへ者め。え、ぬけ！ ぬけ！

時之助 伯父上、御免！ (刀を抜く)

伊織 新之丞どのも、それ！ おかゝりなされ。

新之丞 御免！

(二人とも漸く刀を抜く。半三郎と澤之助、二人に先をこされまいとして、盛んに斬り込む。伊織。

二人を避け時之助の刀を待つ。時之助後退みして、斬り込まず)

伊織 それ、時之助、斬つて来い！

時之助 御免。(斬り込めども激しくはかゝらず)

伊織 太刀先が、にぶいぞ。それ時之助其方初太刀を。

(半三郎、澤之助激しく斬り込む、伊織激しく斬り拂ふ)

伊織 時之助、かゝれ！

(時之助かゝらず。亂闘つゞく、伊織時之助に斬られんとすれども、時之助斬らず)

伊織 お前達の鈍刀では、この伊織には刀が立たぬ。いつそかうしてやらう。

(伊織退いて縁に腰かけ、刀を返して自ら腹を突く)

時之助 駈け寄りながら、伯父上。

伊織 娘を出石の拙者弟の家まで頼む。

時之助 畏りました。

伊織 おゝみんな一太刀づつ恨め！ これで、めでたく、本懐を達したとらう。四人仲よく歸國して

天晴武士の譽れを上げい。それ、一太刀宛斬れ！ 斬らぬか！

半三郎、澤之助達も茫然として振り上げた刀をおろし得ざる中に。

—幕—

秀吉と清正（二幕三場）

——新釋『地震加藤』——

第一場

伏見桃山、加藤清正の屋敷の表書院。遠くから、清正が、題目を誦する聲が、ほのかにきこえて来る。飯田覺兵衛、四人の家來と話をしてゐる。

侍一 あゝの題目を、御唱へになつてゐる聲を聞くと、腸の底まで、沁みるやうな氣が致す。(瞑目して俯く)

(一座、暫く、沈黙して、聞入つてゐる。侍二、覺兵衛をみて)

侍二 御前の、この邊に(と、頬を撫で) いかう、瘦つれが見えて參つた様子、蔚山籠城の折にさへ、左程の事もなかつた屈強の御身體が、かうも御痛はしく見えるとは、御心中の無念いかばかりかとお察し申し上げられる。

飯田 (うなづいて) 太閤殿下と、我君とは、外ならぬ御間柄ぢや。三歳の年より殿下の許にて、人となりなされ、虎よ兄者と(聲を、落して) 可愛がられ、お慕ひなされたといふ御仲ぢやに、今度の御勘氣の、厳しさと申すものは。(と俯く)

侍三 それも、石田、小西などの、舌先のなせし業と思ふと残念でござる。讒者の言葉と申すものは、淀君の閨中の御言葉と相俟つて、君の心をうごかすものと相見える。

侍四 彼等の口辯達者に引換へて、我君ときては、武勇の程こそ、鬼上官と、異國、大明の果まで鳴

飯田 さうとも(と、大きく領き)たい律義眞方、——今度の御勘氣にしても、御名代たる小西行長を、何故、町人と罵つたかとの御咎ぢやが、一應は聞えるが、あの行長めが散々の敗走振り、李如松四十萬の大兵を見て、俄かに怯氣づき、平壤を捨てる狼狽ぶりを、異國人に侮られては東朝武門の名折れ、又太閤の御恥辱と、心づかれて我君の機轉、彼は界の町人上りと、大明人に仰せられしを、行長聞いて無念と思ひ、小人輩め、尾に鱒つけての讒言沙汰したのぢや。

侍一 お、御出座で御座らう。

清正 (座席を正し、襖の方を見る。清正、小姓、木村又藏、外家來をつれて入つて来る。一同、挨拶) 夕焼にしては、ちと、空が赤すぎるのう。何となく、頭が重い。(俯いて) 心が、晴れぬからでもあらうかのう。

木村 お氣のせむのみでなく、何となく重苦しい空模様でござります。

飯田 空も重苦しくならうわい。近頃の世の中は、闇になつたわ(清正の顔を見て) いかう、御瘦せが見えまするぞ、御前。

清正 (顔を上げて) うむ(と、頬を撫で、髯を握り) その代り、これがのびて、だんくかぶとを被るとき、頬當がしつくりするわ、あはムムム。

飯田 (膝をすゝめて) 笑ひ事では、御座りませぬぞ。何故、押して、伺候の上、申開きなされませぬぞ。

清正 昔は、御兄君と、臥床の中まで、づかくとは入つたが、今は天下の主と、家臣。こゝのけちめを亂しては、諸將へのしめしがつかぬわ。御指圖、御呼出しのあるまでは、朝夕の題目にて、君の御運を祈るのが、清正たゞ一つの勤めぢや。

木村 いゝや(と、強く、首を振り) このまゝ、安閑と、時日に移すに於ては、石田、小西の鼠輩共、いかなる策を廻らさんやも計り難く、又、世上の噂としても、一言半句の、御辯解も、無き時は、却つてあらぬ疑をかけるの道理、君が一期の浮沈にござりますほどに、押しての御伺候ねがはしう存じます。

清正 (首を振る) いゝや、さうではない。我三歳の時より、親を尊び、兄を慕ひ、十三歳にして、姉川の初陣、浅井の家臣が兜首を討取り、虎、出かした、と、感状さへ賜り(俯いて) 爾來、君の御恩に押れすぎたぞ。羽柴藤吉郎の昔ならば、いざ知らず、天下を統べ給ふ太閤として、近親、縁者に偏頗あつては、天下の政道の表にかゝはる。清正、君の御許も無きに、豊臣の姓を名乗りしも、殿下の御威光を示さん腹ではあつたれど、これも、恩寵に押れての業と思はれても餘儀ない事ぢや。所謂、泣いて、馬稷を斬るのとへ、天下を知り、三軍を統べたまふ君としては、御尤もの御處置ぢやわい。

飯田 いゝや、朝鮮にて、豊臣の清正と、御名乗りなされしは一時の方便、兵家の申す、機により、

變に應ずるもの、もとより、殿下の御威勢を、大明人へ示さん御心ぢや。それしきの事を、御明察なき、太閤殿下にては、よも御座るまい。その御英明を曇らせ参らす奸人ばらが、怪しからぬので御座りまする。

木村 さうとも、たゞ一筋に、殿下の爲と、思召す御心は、神明も御照覽、それが何故、殿下に通じませぬか、それと申すも、石田、小西の算盤武士が殿下の左右にゐるからでござります。彼奴等、つべこべ侍が、御前でのさばる限りには、豊臣の家も、御運の末かと存じまする。

清正 (木村へ、鋭く) 又藏、言葉をつゝしめ。

木村 はつ。(と、頭を下げる)

清正 我等、幼少の時よりの心懸けは、一番乗、一番槍、一番首、長しては戦場のかげ引、又、君に仕へては忠、己を持しては直、世に處しては廉、臣に對しては寛と、ぢやが、天下統一の大策も成り、一番乗を、しようにも、この日本國中には戦がない。泰平になつた時節には、石田、小西、増田、中村など、算盤上手も、口達者も、中々御用に立つものぢや。(と微笑む)

木村 (だん／＼激して來て) それなら、その泰平のなまくら球を何故、我君と押並べて、朝鮮兩道の先陣を仰付けられたか、太閤殿下にも御似合ひのなき御失策。

清正 殿下に、御失策があらうか、武勇と智慧のくらべ合ひぢや、釜山海の渡海には、見事、拙者を出し抜いての小西の先陣振り、堺の茶屋上りにしては天晴れの器量、流石に、殿下の御見立ちやわい。

木村 (疊を叩いて) え、い、我君、又しても、それを——小西めが、舌を出して居りますぞ。御慈悲深さも、よい加減になされませ。敵の旗を見たゞけで、二千里餘りも吃驚敗亡した行長では御座りませぬか。

飯田 それに引換へ、蔚山の籠城。(と、俯く)

侍一 未だ、忘れは仕りませぬ。鼠さへも食ひ盡して、三日が間は水ばかり。

侍二 山野に起臥して、雨露には打たれ。

侍三 雪に寝ね。

侍四 霜に伏し。

木村 五年の間、艱難辛苦いたしましたぞ。それを思へば、御勘氣などとは、心外千萬でござりまする。

清正 そちや、殿下を御怨み申すか。

木村 怨めしく存じ奉りまする。(と、口早に云ひすて、俯く)

清正 はッは、至誠は天に通じるものぢや、鬼神とても泣くものぢや。物心覺えて以來、たゞ一途に、殿下大事と働いて参つた清正の心は、必ず殿下は御存じの筈ぢや。

木村 それを近くにて曇らせ参らす奴めらがござりまする。それに殿下も殿下で御座りまする。御幼少の折から、御馴染深きわが君をさし置いて、小西、石田などをお近づけ遊ばすなど、残念至極ではござりませぬか。殿下の御心が御心なら、君にもしかと御覺悟が肝腎かと心得まする。頼みが

たなき、殿下を御頼みなさらずとも、徳川殿と申すしかとした御方もござりまする。ひそかに、徳川殿にお頼み遊ばし、君が御一身の安泰をおはかり遊ばすこと何よりも肝要……。

清正 又藏、何、何と申すか。

木村 と、申しても、このまゝ石田、小西輩の讒言により、御一身御一家を滅し、多年の御武功を空に遊ばすこと、なんぼ御無念ではござりませぬか。

清正 云ふな、又藏。かりそめにも太閤殿下に二心をいだいて、一身の安泰をはかる氣持はないぞ。

木村 でも……。

清正 くどく申すと、手は見せぬぞ。

木村 はつ。(平伏する)

飯田 又藏、言葉がすぎる。慎まつしやい。

清正 小西、石田、あのやうな小人ばらを恨む心は、この清正には微塵ない。たゞ幼少の折より、一途に頼み奉つた太閤殿下の御心に、なぜ清正の心が通じないか。兄ぢやよ、虎よと、幾十年親しみ申したこの清正の心が、なぜお分りにならないのか。それが恨めしいと云ふよりも、はがゆいぢや。わづか、四五年お膝下を遠ざかつたばかりに、この清正を疎んじたまふ殿下ではない筈ぢや

が、わしはそれが無念でならぬのぢや。

木村、飯田 お道理でござりまする。

清正 朝鮮陣五年の間はおろかのこと、わしが七字の題目の指物を風にひるがへし、片鎌やりをしご

いて、戦場を往來した、この幾十年の間、殿下のおために、一命を捨つる覺悟が、ゆるんだことが、一度でもあつたらうか。君の武運長久を祈らぬ日が、一日でもあつたらうか。この清正の心持が、今更殿下に疑はれることが、わしは心外なのぢや。

木村 御尤もでござりまする。察するところ、殿下のお心は、小西、石田……

清正 又しても、小西、石田、きゝたらない、だまれ……

木村 と申してもあの辯口にたけた石田めが……

清正 ひかへぬか又藏!

木村 はつ……。 (木村平伏する刹那、物すごい音と共に天地ゆれる。家來どもさわぐ)

飯田 地震でござりまするな。御動座々々々。

清正 さわぐな、さわぐな。火のもと用心が第一ぢや、火のもとを見て廻れ。襖障子が、落ちかゝら

ば燭臺の火を消せよ。(地震いよく激し、家來達前後にゆられながら、火を消す。襖など、バタバ

タと落ちてくる。その間に清正立つて、鎧櫃の蓋をはね上げる。鎧を着る支度をなす)

第二場

(地震にて大破したる加藤邸の玄關、なほゆりつゞけてある。侍四五人)

甲 まんざいらく。まんざいらく。

乙 ひどい地震ぢや。まだゆりやまぬぞ。
 丙 瓦があんなに飛んでるわ。
 丁 家の中からは、女どもの悲鳴がきこえるわ。
 甲 君には、無事に御動座なされたらうか。
 丙 お臺所の方に煙が見えるぞ。
 甲 火事になつたら一大事だ。身共はあれへかけつけて参るぞ。(甲、丙走り去る)
 丁 とは云へ君の御身も大切ぢや。

(加藤の臣四五人鎧下、胸あて、こてすね當にて出て来る)

臣一 御主君は御無事か。
 臣二 御身の上に別状ないか。
 丁 未だお姿が見えないのぢや。
 臣三 若し屋根の下ではないか。
 乙 たしか御書院で木村、飯田等と御對談中であつた筈だ。
 臣一 それでは御書院の屋根を破つて見よう。
 臣二 (大聲にて) 我が君へ何れに在せられるぞ。
 臣三 上様々々何れに在せられるぞ。
 清正 氣遣ひ致すな。只今それへ出て参るぞ。

臣一 おへ、あの聲は正しく我が君。さては御無事か。
 臣二 祝着至極ぢや。
 臣三 正しく屋根の下なる御様子。
 清正 いやへそれと及ばぬ。

(と清正屋根の破風を壊し、鎧下、直垂、こて、すね當、めてざしを口にくはへて出てくる。その後より木村、飯田等出てくる)

臣一 これ我が君には、お怪我も無く。
 臣二 御安泰にて。
 臣三 祝着至極に存じます。
 清正 年より共の尊に聞く。寶徳文正の大地震も斯くやと思ふばかりの大地震ぢや。その方共も、怪我がなくて祝着ぢや。さて桃山御殿の様子はどうぢや。
 臣一 只今物見の築山より、桃山城下を見渡せしに、土煙は城を掩うて、暗夜の如く、更にあい色も分りませぬが、桃山御殿は、ついぢも崩れ、えい中はひどく破損の有様で御座ります。
 清正 すは、我君の御一大事。誰かある。奥へ参り、大政所より拜領の蛭卷の長刀と、鎧とを持参致せ。
 臣二 かしこまつて御座ります。

清正 まつた、その方共は、この具足に身をかため鐵挺子を持參致すやう長屋々々へともぶれ致せ。
木村 それ我が君様には、此の天變の最中に、何れへお出ましましたなされますか。

清正 知れたこと、桃山城へ出仕致すのだ。
木村 はて、それは思慮深き我君様のなされ方とも思へませぬ。未だ御勘氣御赦免無き中に、押して御出仕ある時は、石田、小西の讒言に依つて、又如何様のお咎めの種となるかも知れませぬ。此の儀はひとへに御止まり遊ばすやう。

飯田 木村の申すこと通りで御座ります。かゝる天變の場合、おしての御出仕は、石を抱いて滞に臨む譬への如く、御勘氣の上にも御勘氣を重ねる事となるかも知れませぬ。

清正 其の方共の心配も一應は、道理ぢやが、身の咎を恐れて御主君が必の危難に、おち合ざる道理があらうか。たとへ今宵の出仕が、新しき御咎の種となり、切腹仰せつかれようとも、清正は殿下の御安否を御見届け申さずには、居られぬぢや。この心がすまんのぢや。(胸をたたく) 重ねてのとめだて無用に致せ。

飯田 さばかりの思召ならば、拙者共一命かけてお供致す。

(人数おひひ集まる)

清正 おゝ、平生のたしなみよく、瞬時の間の勢揃ひ、満足ぢや。一刻も早く桃山へ参らうぞ。つゞけ者共。

(此の時大いなる揺れ返し)

清正 おゝ、大地が波の様に揺れるわ。

飯田 おゝ、烈しい揺れ返しだ。

清正 ものども大地をよく踏みしめて歩け。皆々 はゝあつ。

第三場

(政所、淀君、幸藏主、侍女、秀吉、坊主、庭の大樹の下に立つてゐる) 坊主幕を張らうとして振へ、張れず、淀君太閤の袖にすがつてゐる)

秀吉 (空を仰いで) いつの間にか月が無くなつた。ほうボンヤリとあゝこにあるな。土煙がたちこめてゐるのぢやなあ。北の空がほのかに明るいは京の町が焼けてゐるのかなあ。(地震。土塀倒れかかる。侍女達悲鳴をあげる。幸藏主、木へ抱きつく。秀吉、政所の手を取り、淀君の肩を抱へながら)

秀吉 もう大事な。心配せぬともよい。(小姓二人疊を持つてくる。秀吉、女達其上へ坐る。坊主は幕を張り終る)

淀君 まあゝ、恐しい地震。こんな恐しい所、わらははいやぢや。すぐ大阪城へ移りませう。
秀吉 大阪はもつと揺れてゐる。城は滅茶々々かも知れぬ。

淀君 何のお城がつぶれてなりませうかいなあ。あれえ！（小さく又揺れる）
幸藏主 でも、やつと人心地になりましたわいなあ。我が君があの大いお聲で、庭へ出えへ〜と云ふお聲をたよりに、夢心地で庭へとび出しました。

秀吉 わしの聲は、五萬人位の人數へは透ると申すで。地震の物音よりは、わしの聲の方が大きい筈ぢや。ハアハ、、、（小姓を見て）怪我人、死人は無いか。見て參れ。

小姓一 は〜。
秀吉 探して廻れ。

小姓二 かしこまりました御座ります。

淀君 お前たちが居ないと、女ばかりになる。此の騒ぎに何者が入り込まんともはかり難い。此處に居てたもれ。

秀吉 茶々め、何を申す。天地が崩るゝとも、此の秀吉の威勢が崩るゝものか。早う行つて怪我人共を探して參れ。坊主達は所々を見廻つて火の用心を致せ。（坊主、小姓たち去る）

政所 それにしても臣衆、諸大名のかけつけは、なぜこの様におそいので御座います。

秀吉 はあッは〜。斯う云ふ時には、一番自分の身が大切なのぢや。地震がをさまつたら、わいのことを考へ出して、おひ〜かけつけて參るであらう。

政所 斯様な時、肥後殿か左衛門の太夫でも居りましたら、なんぼう心強いことで御座りませう。
淀君 肥後守殿は御勘中の方。御前では名前も申し上げぬ方がよろしう御座いませう。

幸藏主 でも斯様な時は、一番に頼りになる方では御座いませんか。

秀吉 幸藏主、黙つてゐるがよい。肥後め、もう家臣とは思つてゐないぞ。あいつは俺に狎れすぎてゐるのだ。わしが關白になり、太閤になつても、未だわしを昔の藤吉郎だと思つてゐるのだ。彼奴は、わしを兄ぢやと云つたことを、いつ迄たつても、忘れないのぢや。彼奴は心の中でつけ上つてゐるのぢや。だから、わしの名代、小西行長を町人呼ばはりした。わしの許も得ないで、豊臣の姓を名のつたりするのぢや。わしの恩につけ上る奴を、許しておいては、天下のしめしがつかんのぢや。近々に彼奴を呼び出し、不審のかどを質し、申し譯たゝない時は、切腹させる積りぢや。

政所 それはまあ、お情ない。

幸藏主 何様にお詫ひなしても。

秀吉 くだい。黙れ〜。

幸藏主 ぜひもなきことで御座います。

（其の時又烈しい揺れ返しがある。女中達悲鳴をあぐ）
淀君 お〜、恐い〜、又揺れ返して御座います。

（此の時、清正。臣等連れて出てくる）

清正 幸藏主は在さぬか。幸藏主、々々々、

幸藏主 わらはを呼ぶのは何人なるか。（幕より外へ出て来る）

幸藏主 わらはを呼ぶのは何人ぞ。

清正 加藤肥後守清正で御座ります。

幸藏主 何、清正殿か。(幸藏主、清正の傍へかけつける)

幸藏主 お、清正殿で御座つたか。

清正 幸藏主殿、御挨拶はさておき、今宵の地震に、我が君には御安泰で御座りますか。

幸藏主 御案じなされませぬ。

清正 お、それは何よりかたじけない。者共喜べ。我君には御無事なるぞ。

幸藏主 あれなるまくの中に。

清正 お、おなつかしい。お目通りかなひませぬでござりませうか。

幸藏主 御勘氣の御身の上なれど、御取次ぎ致して見ませう。

(幸藏主、幕の中に入る)

政所 何事なるぞ。

幸藏主 肥後守清正、御勘氣の御身なれど、君の御身を御案じ申し、屈強の臣共に、鐵の棒を持參致させ、只今あれにかけつけまして御座います。

政所 おう、さては清正が、一番に參つたか。

秀吉 何、清正が參つたのか。彼奴が一番に來たのか。

幸藏主 御目通り御許しになりませうか。

淀君 それはもとよりなりませぬ。御勘氣中の身の上ではござりませぬか。

幸藏主 わが君、いかゞでござりませうか。

秀吉 ふん、兎に角會うて見よう、呼べ。

(幸藏主、喜んで、ころげる様に出す)

幸藏主 清正殿、御許しが出ましたぞ。急いでこれへ。

清正 (喜んでをどり上りながら、ころげる様に幕の中へかけ込む) ははッ。(と平伏する)

秀吉 虎之助か。

清正 ははッ。

秀吉 よく參つたな。

清正 ははッ!

秀吉 お、少しやせてゐるな。

清正 君は御無事で。

秀吉 うゝむ。地震と氣がつくと、一番に逃げ出したぞ。

清正 祝着至極に存じます。(おろろ泣く)

秀吉 うゝむ、その方も無事で目出たい。

(清正嬉し泣きに泣きつゝ)

秀吉 朝鮮では苦勞をしたらうな。

清正 は、つ。

秀吉 中門はどうして通つて来た。中門は誰もかためてゐなかつたか。

清正 はあ。はあ、何人も。

秀吉 うむ。それは不用心ぢや。その方に中門のかためを申しつくるぞ。

清正 はあ、有難き仕合せ。

秀吉 地震が止んだら、重ねて目通り許すぞ。行け。

清正 はあ、(清正、喜び勇んで出る)

秀吉 お、相變らず勇ましい奴ぢや。彼奴が中門をかためてゐれば、地震の方でも恐れて逃げるぞ。

淀君 とは申しましても、我君様は、何と云ふ、御心變りの早い方で御座いませう。先刻迄の烈しい

御勘氣を、けろりとお忘れ遊ばす等、頼り無い方で御座いますのう。

秀吉 あは、あは、あの髻面で、わしの無事な顔を見て、おろおろ泣いたところを見ると、怒つて居られるか。はあは、あは、この大地震で君臣の心をへだつ垣も崩れたのだ。あは、あは、

——幕——

(兩角製本)

昭和五年四月十八日印刷
昭和五年四月二十日發行



改正文庫 第二 第百二十篇
戯曲篇(時代物) 定價五十錢

著者 菊池 寛
發行者 山本 三生
印刷者 杉山 愛二
東京市芝區愛宕下町四ノ四〇
東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二

發兌 東京市芝區愛宕下町四丁目四十四番地

改造社
振替口座東京八四〇二番
電話芝(43)自一二二四番
至一二二四番

株式會社秀英印刷

我社は世界に於ける出版界の革命者である。廉價全集の創始者である。我社が大正十五年十一月多大の犠牲を豫期して廉價全集を發行するや、感激の聲國內を震撼し、日々數千通の感謝狀が舞ひ込んだ。今迄特權階級のみの藝術であり、哲學であり、經濟、美術、科學であつたものが無産階級の全野に解放されてからは全國を通じて讀書階級が一時に數十倍となつた。この劃期的現象を招來し、我國の文化を一時に引上げ文化史上赫々たる我社は、尙當時の宣言の徹底を期して茲に「改造文庫」を發刊せんとす。尙その内容は別記の如くであるが、我社は數十年を期してあらゆる權威ある著作を本集に網羅して民衆的一大文庫を建設せんと欲す。諸君の期待と支持を俟つ。

□此の文庫は、内容厳選と最低の廉價とを以て第一義とし、専ら大衆普及を目的として刊行す。
 □此文庫に收容するものは、東西古今百種の書に互り、校訂、註釋、翻譯、總て典據たるべきを期す。
 □此文庫は、社會、經濟、政治、哲學、思想、歴史、文學、藝術、美術等百般に及ぶ。
 □表紙上の番號は單に發行順を示すものなれど、將 檢案上の便宜を考慮に容れて之を示す。
 □一冊の分量は約百頁以上五百頁とし定價は約百頁を單位として拾錢としその冊子の頁に應じて二十錢、三十錢、四十錢、五十錢とす。但、地圖附録等挿入の場合は、必らずしもこの例に依らず。
 □表紙意匠中、1は十錢、2は二十錢を、3は三十錢を示す。以下之に倣ふ。
 □定價及び送料左表の如し。

送料(錢)	定價(錢)	表紙背の符號
三	一〇	1
四	二〇	2
六	三〇	3
八	四〇	4
一〇	五〇	5
一三	六〇	6
一四	七〇	7
一六	八〇	8

改造文庫第一部目録

- 第一篇 富國論(上卷) アダム・スミス著(近刊)
- 第二篇 富國論(中卷) アダム・スミス著(近刊)
- 第三篇 富國論(下卷) アダム・スミス著(近刊)
- 第四篇 人口論 ロバート・マルサス著(近刊)
- 第五篇 經濟學原理 デビッド・リカード著(近刊)
- 第六篇 經濟學原理(上卷) スチュアート・ミル著(近刊)
- 第七篇 經濟學原理(下卷) スチュアート・ミル著(近刊)
- 第八篇 經濟學方法論 カール・メンガー著(近刊)
- 第九篇 經濟學原理 チェンボンス著(近刊)
- 第一〇篇 社會主義の發展 エンゲルス著(近刊)

- 第一篇 マルキシズム論 石川準十郎著
- 第二篇 辯證法的唯物觀 山川均著
- 第三篇 哲學の實果 山川均著
- 第四篇 神と國家 本莊可宗著
- 第五篇 婦人論 山川菊榮著
- 第六篇 古代社會(上卷) モルガン著(近刊)
- 第七篇 古代社會(下卷) モルガン著(近刊)
- 第八篇 エミール(上卷) 内山賢次著
- 第九篇 エミール(下卷) 内山賢次著
- 第二〇篇 國家論 オッペンハイム著
- 第二一篇 金融資本論 猪俣津南雄著
- 第二二篇 日本開化小史 田口卯吉著

第二三篇	日本經濟論	田口卯吉著	1
第二四篇	日本經濟學說の要領	龍本誠一著	2
第二五篇	日本商業史	横井時冬著	4
第二六篇	日本工業史	横井時冬著	4
第二七篇	經濟學の實際知識	高橋龜吉著	2
第二八篇	リッケルト論文集	リッケルト著	2
第二九篇	フツサル論文集	フツサル著	2
第三〇篇	女工哀史	細井和喜藏著	4
第三一篇	婦人解放論	スチユアト・ミル著	2
第三二篇	社會進化的地位	ラッパポルト著	2
第三三篇	共産主義小兒病	レニン著	2
第三四篇	二十世紀初頭の農村問題	レニン著	2
第三五篇	文學と革命	トロツキイ著	2
第三六篇	幸徳秋水集	幸徳秋水著	2
第三七篇	中江兆民集	中江兆民著	2
第三八篇	財産起源論	レヴィンスキイ著	1
第三九篇	組織論	鈴木厚著	3
第四〇篇	三民主義	孫中山著	3
第四一篇	唯一者とその所有	マックス・ステイルネル著	6
第四二篇	世事見聞録	武陽士著	2
第四三篇	金融資本論	ヒルファディング著	7
第四四篇	近世封建社會の研究	本庄榮治郎著	2
第四五篇	我近世の農村問題	本庄榮治郎著	3
第四六篇	マルクスの歴史、社會並に國家理論(上卷)	ハインリッヒ・クラープ著	3

(以下續刊)

第四七篇	マルクスの歴史、社會並に國家理論(下卷)	ハインリッヒ・クラープ著	7
第四八篇	マルクス主義國家觀	マックス・アドラー著	5
第四九篇	マルクス主義經濟學	河上肇著	3
第五〇篇	哲學概説	桑木巖翼著	3
第五一篇	現代哲學思潮	桑木巖翼著	3
第五九篇	政治心理學	ウオーラズ著	2
第六〇篇	唯物史觀概説	ゴルトテリ彦著	2
第六一篇	無政府主義と社會主義	プレカアノフ著	2
第六二篇	財産進化論	ラフツルグ著	2
第六三篇	帝國主義論	レニンス著	2
第六四篇	帝國主義論	ホブソン著	2
第六五篇	勞働價值説の擁護	ヒルファディング著	2
第六六篇	經濟地理概論	ブレブス・リーゲ編	3

改造文庫第二部目録

第一篇 古 事 記 濁瀧 久孝校訂(近)	第二篇 山 家 集 齋藤 茂吉校註(近)	第二篇 雨 月 物語 山口 剛校訂(近)
第二篇 萬葉集(上卷) 折口 信夫校訂(近)	第三篇 俳諧七部集 萩原 蘿月校訂 3	第三篇 伊勢物語 久松 蒼一校訂(近)
第三篇 萬葉集(下卷) 折口 信夫校訂(近)	第四篇 蕪村七部集 萩原 蘿月校訂 2	第四篇 神皇正統記 宮地 直一校註 3
第四篇 古今集 吉澤 義則校註(近)	第五篇 奧の細道 萩原 蘿月校訂 3	第五篇 新古今集 吉澤 義則校註(近)
第五篇 新古今集 吉澤 義則校註(近)	第六篇 會根崎心中 獄中 黒木 勘藏校註(近)	第六篇 新源氏物語(上卷) 折口 信夫校註(近)
第六篇 新源氏物語(上卷) 折口 信夫校註(近)	第七篇 會根崎心中 獄中 黒木 勘藏校註(近)	第七篇 新源氏物語(下卷) 折口 信夫校註(近)
第七篇 新源氏物語(下卷) 折口 信夫校註(近)	第八篇 國姓爺合戦 黒木 勘藏校註(近)	第八篇 枕草紙 山岸 徳平校訂(近)
第八篇 枕草紙 山岸 徳平校訂(近)	第九篇 槍權三重帷子 門 黒木 勘藏校註(近)	第九篇 金 槐 集 幸田 露伴校註(近)
第九篇 金 槐 集 幸田 露伴校註(近)	第十篇 心 霧阿波 鳴門 黒木 勘藏校註(近)	第十篇 平家物語 (近)
第十篇 心 霧阿波 鳴門 黒木 勘藏校註(近)		

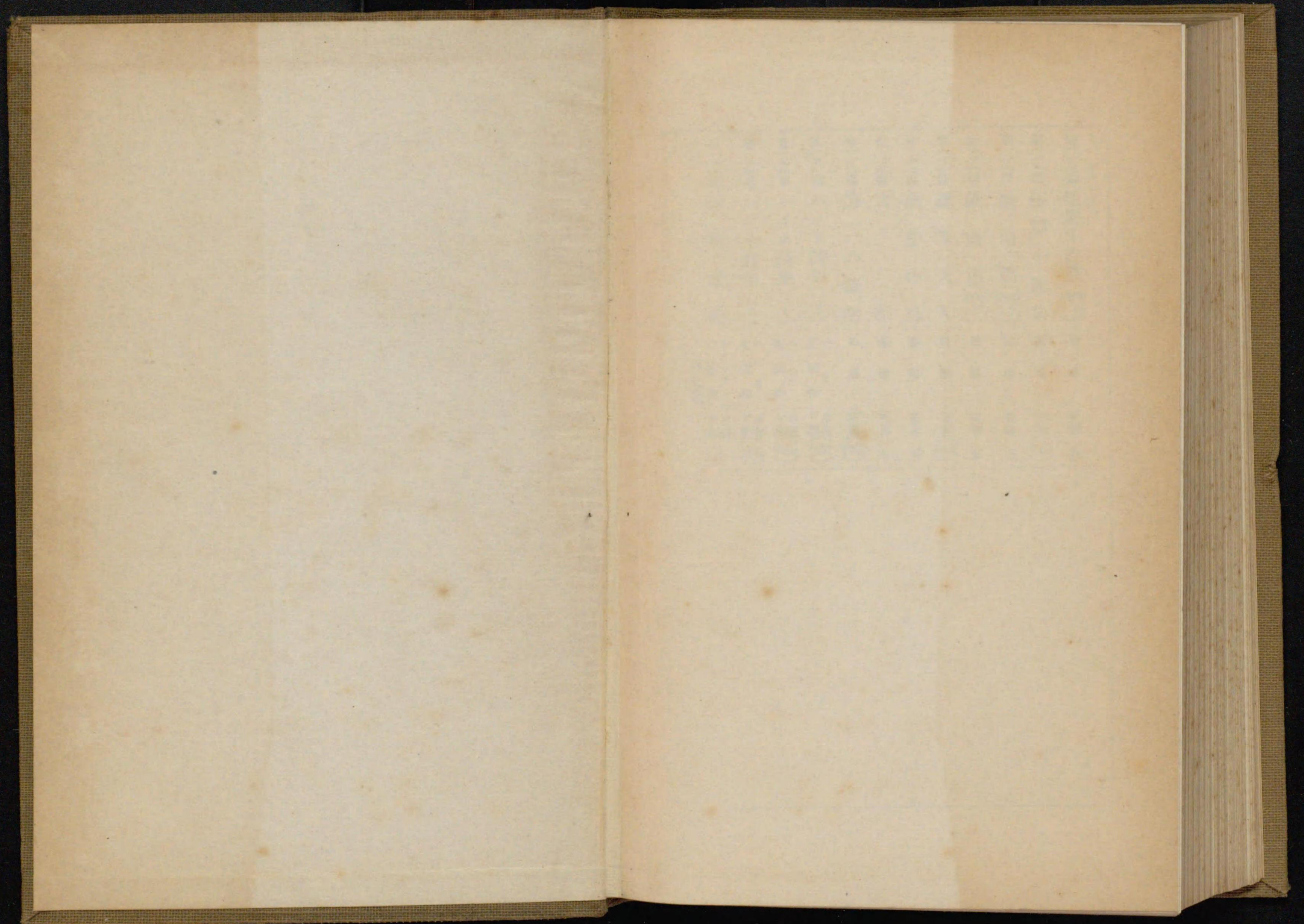
第三篇 山崎與次兵衛壽 門松 心中宵庚申 黒木 勘藏校註(近)	第三五篇 北村透谷選集 島崎 藤村編 1
第二四篇 傾城反魂香 黒木 勘藏校註(近)	第三六篇 樋口一葉選集 樋口 一葉著 1
第二五篇 淀鯉出世瀧切 黒木 勘藏校註(近)	第三七篇 平 凡二葉亭主人著 1
第二六篇 堀小女郎波枕 黒木 勘藏校註(近)	第三八篇 子規俳話 正岡子規著 3
第二七篇 五十年忌歌念佛 黒木 勘藏校註(近)	第三九篇 子規歌話 正岡子規著(近)
第二八篇 菅原傳受手習鑑 黒木 勘藏校註(近)	第四〇篇 坊つちやん 夏目 漱石著 2
第二九篇 八百屋お七歌祭文 黒木 勘藏校註(近)	第四一篇 草枕 夏目 漱石著 2
第三〇篇 伊賀越道中双六 黒木 勘藏校註(近)	第四二篇 それから 夏目 漱石著 3
第三一篇 大鏡 吉澤 義則校註(近)	第四三篇 悲しき玩砂 石川 啄木著 2
第三二篇 徒然草 吉澤 義則校註(近)	第四四篇 我等の國と彼 石川 啄木著 1
第三三篇 日蓮上人集 (近)	第四五篇 山陰土産その他 高崎 藤村著 2
第三四篇 親鸞上人集 (近)	第四六篇 作曲民謡集 北原 白秋著 2

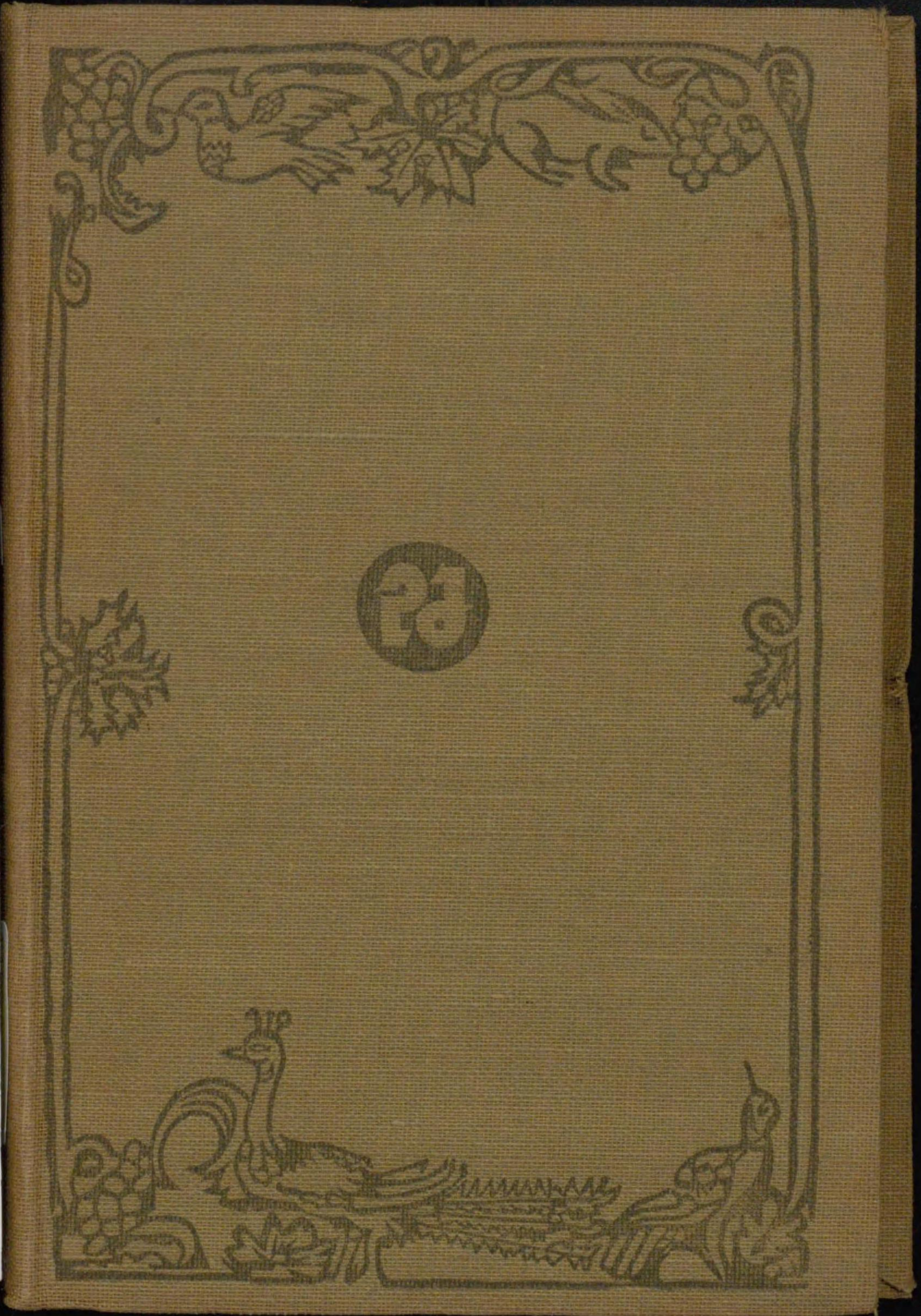
第四七篇 獄 中 記 <small>オスカア・ソイルド</small> 神近市子譯 2	第五九篇 歌自選集 海やまの <small>だひ</small> 釋 迢 空著 4
第四八篇 厭世家の誕生日 佐藤春夫著 1	第六〇篇 歌自選集 立 春木下利玄著 2
第四九篇 日 輪 横光利一著 1	第六一篇 歌自選集 花 櫻 北原白秋著 <small>(刊近)</small>
第五〇篇 労働者の居ない船 葉山嘉樹著 1	第六二篇 歌自選集 人間往來 與謝野晶子著 2
第五一篇 海に生くる人々 葉山嘉樹著 2	第六三篇 歌自選集 槻 の 木 澤田空穂著 2
第五二篇 小 公 子 <small>バアネット</small> 若松賤子譯 2	第六四篇 歌自選集 野原の廓公 若山牧水著 2
第五三篇 ホワイト・フアング 塚利彦譯 3	第六五篇 歌自選集 原 生 林前田夕暮著 3
第五四篇 は や り 唄 小杉天外著 <small>(刊近)</small>	第六六篇 歌自選集 空を仰ぐ 土岐善麿著 2
第五五篇 朝の螢 齋藤茂吉著 2	第六七篇 白作曲 童 謡 集 北原白秋著 2
第五六篇 自選集 十 年 島木赤彦著 <small>(刊近)</small>	第六八篇 白作曲 國民歌謡集 北原白秋著 2
第五七篇 自選集 川のほとり 古泉千櫻著 2	第六九篇 白作曲 舞踊詞集 北原白秋著 2
第五八篇 自選集 松の芽 中村憲吉著 2	第七〇篇 背 德 者 <small>アンドレ・ジッド</small> 淳譯 2

第七一篇 チェホフ書簡集 内山賢次譯 5	第九三篇 一 週 間 <small>リベ・インスキー</small> 池谷信三郎譯 2
第七六篇 愚 庵 歌 集 齋藤茂吉編 <small>(刊近)</small>	第九四篇 室生犀星詩集 室生犀星著 5
第七七篇 芭蕉遺語集 萩原井泉水校訂 <small>(刊近)</small>	第九五篇 千家元麿詩集 千家元麿著 3
第七八篇 七番日記 <small>(上卷)</small> 萩原井泉水校訂 <small>(刊近)</small>	第九六篇 横瀬夜雨詩集 横瀬夜雨著 5
第七九篇 七番日記 <small>(下卷)</small> 萩原井泉水校訂 <small>(刊近)</small>	第九七篇 修禪寺物語 岡本綺堂著 3
第八〇篇 お ら が 春 萩原井泉水校訂 <small>(刊近)</small>	第九八篇 少年の悲哀 國木田獨步著 2
第八二篇 新花つみ <small>(蕪村日記)</small> 萩原井泉水編 <small>(刊近)</small>	第九九篇 運 命 論 者 國木田獨步著 <small>(刊近)</small>
第八八篇 寡婦マルタ <small>エリザ・オルセン</small> 清見睦郎譯 3	第一〇五篇 佛蘭西家庭童話集 <small>ボーモン</small> 長松英一譯 3
第八九篇 句 集 虚子高瀨虚子著 6	第二三篇 奈落の人々 <small>ジャック・ロンドン</small> 和氣律次郎譯 3
第九〇篇 井泉水句集 萩原井泉水著 5	第二一篇 争 鬪 <small>ジョン・ゴルスウオシイ</small> 和氣律次郎譯 2
第九一篇 サ ニ ン <small>アルツイバ</small> 武林無想庵譯 6	第二二篇 短篇小説篇 <small>(現代物1)</small> 菊池 寛著 <small>(刊近)</small>
第九二篇 一青年の告白 <small>ツヨージ・ムーア</small> 辻潤譯 3	第二六篇 短篇小説篇 <small>(現代物2)</small> 菊池 寛著 4

第一七篇	短篇小説篇 <small>(物時代)</small>	菊池	寛著	5
第二八篇	短篇小説集	菊池	寛著 <small>(刊近)</small>	5
第二九篇	戯曲 <small>(物現代)</small>	菊池	寛著	5
第三〇篇	戯曲 <small>(物時代)</small>	菊池	寛著	5
第三一篇	眞珠夫人	菊池	寛著 <small>(刊近)</small>	5
第三二篇	慈悲心	菊池	寛著	4
第三三篇	火	菊池	寛著	4
第三四篇	第一一の接吻	菊池	寛著 <small>(刊近)</small>	4
第三五篇	ハイネ詩集 1)	ハ田イ春	ハ田イ春 <small>(刊近)</small>	1
第三六篇	ハイネ詩集 2)	ハ田イ春	ハ田イ春 <small>(刊近)</small>	2
第三七篇	ハイネ詩集 3)	ハ田イ春	ハ田イ春 <small>(刊近)</small>	3
第三八篇	洋服箒笥	トーマス・マン	トーマス・マン <small>(刊近)</small>	2

(以下續刊)



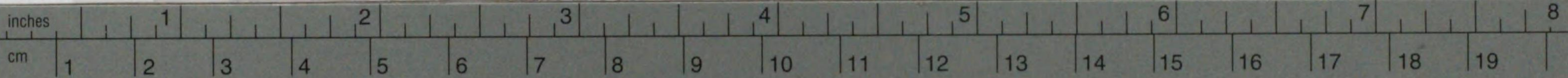


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

